
転生したと思ったらペルソナ

はいんちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生したと思ったらペルソナ

【Nコード】

N0597Z

【作者名】

はいんちゃん

【あらすじ】

転生したけど神様はいなかった。

許さんぞ神イイ!! (前書き)

俺は本当に駄目な奴だ

許さんぞ神イイ！！

「はっ！！」

何度この身の丈ほどの大剣をふるっただろうか。

斬るのではなく叩きつぶす。そんな剣技も何もない不粋な剣。人ではない何かを打倒する為の剣。

剣を振るうごとに消滅していく化物。

この剣は目の前の化物を殺す為だけに作ったものだ。

この体は目の前の化物を殺す為だけに造られたものだ。

「温い温い温い！！さっき入った風呂よりぬるぬるだっつーの！！」

ただ力任せに振り回すと、重量と勢いも相まってヘドロのような化物の身体は容易く二つに開かれた。

生ぬるい液体が飛び散り、頬に触れる。頬を拭くと袖が真っ黒に染まる……後で洗濯しよう。

すると化物からの反撃。

俺はそれを避け、受け流し、防御する。

一歩間違えば致命傷を負うかもしれない。

だからと言って、一歩も退く気は無い。

死に近い感覚。非日常なう。

そんな興奮が、アドレナリンが脳内を支配する。

だからだろうか、死に触れてみたいと思ってしまうのは。

別に死にたいわけではない。

だが死に近い体験をしてみたい。

死と言う非日常に触れてみたい。

本気で思わなくとも、心の片隅にひっそりと抱えている思い。
死んだ後、自分はどうなるのだろうかと言うちよつとした興味。

……とまあ、それっぽいことをグダグダと言ってみただけ。

とりあえず、俺は1度死んだ。

……嘘じゃない、だから石を投げないでください。

先述したとおり、死は人間であれば誰しもが「1度は」経験するものだ。

これを経験する前は、「誰しもが必ず経験するものだ」と思っていたのだが。

俺の最初の「最期」はなんのこっちゃない、交通事故。

そして目を覚ましたら、真っ白な部屋……病室だった。

最初は助かった？と思ったのだがどうにもおかしい。

俺の手足が短くてそれに動揺していた所、見知らぬおねーさんが俺を抱き上げたのだ。

それを見て瞬時に「成程な」と思った。

俺は所謂転生を体験した、と言う事だ。

つつても神様にも会ってないし便利なチートだつてもらっちゃいない。

便利な主人公補正だつてないから母さんと思っていた人もあっさり病死。

父さんと思っていた人も、愛する者の死に耐えきれなかったのかあっさり俺を捨ててどこかへ蒸発した。

そんな軽く壮絶な人生の先にたどりついたのが、とある研究所。

どうやら捨て子を集めて人体実験を行っているらしい。

——ペルソナの人工的開発。

なんか俺は幸か不幸かペルソナの適正が合った。

だからだろうか、シャドウに対抗する『身体』造りをする事になったのは。

3食流動体の何かだったし訓練以外は無色透明な薬品を打ちこまれる日々だったり。

酷い時は体を削って（物理的に）何かを埋め込まれたり。

他の面々も大して変わらないような事をされていたようだが。

ていうか普通人体実験なんてばれたらヤバいし、中にはその事実を世に広めることでそれを止めようとする人も居るだろう。

……そう思っていたのだが、相変わらず実験の日々。
バックについていた桐条グループが何もかもを握りつぶしていたようだ。

どうやらお偉いさんがこのペルソナとシャドウと言う物に魅せられたらしい。

ははぁん。

転生した理由は分からないが、神と言う物が居たのならあれか。
俺に恨みでもあるんだろうな。

でも俺からしたらそんなこと知ったこっちゃないし、もし仮に会う事があればどんな神でもぶん殴ってやろう。

……嗚呼、愛しい程に憎い神様仏様。いつかこの手で引き裂いてやる。

そんな幻想に近い妄想を糧になんとかここまで生きてきた。

中には拷問のような実験を経て精神に異常をきたしたり、純粹に薬品に対する拒絶反応で肉体的に死んだりする奴も居る中で、それでも俺は何とか生き残る事が出来た。ひょっとしたら主人公補正かもしれない、なんてな。

心は耐えきつても肉体的に死んだら意味無いもんな。まあ薬のせいか髪の毛が黒からくすんだ銀色みたいな鉛色みたいな感じに変色しちゃったけど。

そうまでして得た力と、失ったモノ。

——戦い無しにはいられない。

なんつーか、ちよつとした戦闘中毒者になっちゃった。バトルジャンキ

実験サンプルを取る為に何度もシャドウと戦ったその名残だろう。

そして俺をこんな体にくれた研究所……桐条グループはとある実験でミスって何もかもを御破算にしてくれた。

あの時『滅びの断片』を目の当たりにした俺だったが……いや、その時の事は一先ずおいておこう。

閑話休題。

タルタロス行こうと思っていたが、珍しく街中にシャドウが大量発生したからタルタロスにはいなかった。

それと関係あるのか知らないが、今夜は満月だ。こいつらが居なけりゃ風情ある夜を過ごせただろうに。

「ハア……シャドウを感知できるペルソナだったらなー」

そこんとは不便である。実に不便だ。

いつシャドウが襲いかかってくるかわからないし。

基本的にはシャドウの動きは緩慢なので割と物音で気付けるが。

とか思ってたらほら、物音が……。

「……人間？」

なんかデカイシャドウに追われている人間が居た。

しかしその顔は見知らぬ顔で、多分人工ペルソナ使いではなく、
たまたま迷い込んだかもしくは『天然』の方だろう。

見た感じ鍛えているように見えるから……恐らく後者だろうか。

「シャドウ相手に不覚とってケツまくって逃げてるってとこか」

助けるのはやぶさかではないが。

「正直めんどくさい」

存分に戦ったし日々のストレスはもう「抜いた」。

世の為人の為なんて俺の柄じゃねーし。

「でもまあ……ちょっとつけてみようか」

研究者達が人工って言っていた辺り天然も居るんだろうなと思っ
てはいたのだが、天然モノは初めてだ。

……いや、タルタロスでそれっぽい奴を見かけた事はあるのだが、
あの迷宮だ。ちよつと目を離れた隙に見つけられなくなるから困る。
すると後ろからもシャドウっぽい物音が聞こえてきたのだが、今
現在俺の中での重要度は天然ペルソナ使い（仮称）>シャドウって
事なのでそのシャドウからはさっさと逃げて相手せずに尾行を開始
することにした。

・・・

「はあ、はあ……」

真田明彦は自身を襲った大型シャドウに戦慄しながらも、喜びを
あらわにしていた。

今まで見た中でも一位二位に行く程の強敵。しかし不覚にも不意打ちを受けた事で肋骨が何本か折れてしまったらしく、真田は泣く泣く逃走を已む無くしていた。

気を抜いてしまった戒めだなと真田は自嘲しながらも、兎に角美鶴達に知らせねばと考え無線で作戦室に連絡を試みたところ、すぐに反応が返ってきた。

『こちら、作戦室だ』

『俺だ！』

『……明彦か？どうした？』

『凄い奴を見つけた！これまで、見たことも無い奴だ！』

……ただ、生憎追われていてな。もうすぐそっちに着くから、一応知らせておく』

返答を待たずに無線を切った。これ以上声を張る余裕も真田には無いらしい。

一人で撒けるのならそうしたかったがこの怪我では無理そうだ。

(……情けないな。一人で影時間の中うろついた揚句、強敵を連れて逃げ帰るとは)

二度とこのようなミスはしないと誓いながら、真田は夜の街を駆ける。

・・・

着かず離れずでシャドウにもペルソナ使いにもばれずに尾行する

ことに成功した。

あのデカイシャドウはそこまで頭が良くないらしい。ペルソナ使いは逃げる事で精いっぱいだったみたいだな。

すると学生寮か何かにペルソナ使いは駆け込み、シャドウは壁伝いに上によじ登って行った。

「はぁはん」

どうしようかな。

「うーん……登れない事も無いが……」

ペルソナ使いはどうも意図的にあの建物に逃げ込んだようだし、なにか策の一つでもあるのだろう。

はてさて……どうしたもの……か……！？

「！？」

何だ……！？この感覚は！？

感知能力の無い俺にすらひしひしと伝わる。

言うなれば『死神』の力。10年前にも一度体験したあの感覚。

瞬間、俺は反射的に足に力を込め跳躍していた。

「はっはア！神様ってのは存在するもんだなア！！」

建物の中腹に差しかったところで窓の縁を掴み、腕の力だけで更に宙を舞う。

待ってる愛しい死神様。死を司る神に死を教えてやる。

それとも、死神は俺に二度目の死を教えてくれるのか？

そして辿り着いた屋上。しかしそこには俺の思っていた死神は存在しなかった。

真っ白なペルソナ。背に豎琴のようなものを背負っている。

そして大型シャドウは跡形も無く消え失せており、地上で感じた死神の力も感じられなくなっていた。

「……だ、誰？」

なんかカーディガンを着た女の子がこっちを見ている。

後先程見たペルソナ使い（仮称）とは別の男がペルソナを召喚している。

成程な、この建物は天然ペルソナ使いのすくつ（なぜかへんかンできない）か！

そんで何？雑魚が二匹？大型シャドウもいなければ死神も居ない。何だこれは、馬鹿にしてんのか？

「んだよ面白そうだから着いてきたつてのによお……なーんなーんですかこれエエエ！！？」

こうなったら八つ当たりだ。二体のシャドウを一薙ぎに切り裂く。憐れあっけなく二つに分裂したシャドウ達はあっさりと消滅するのだった。

「またつまらぬ物を斬ってしまった……」

「え、えーっと……」

満足げに頷く俺。

状況が飲み込めていない女の子。

ペルソナを消した後意識も失ったらしくその場に倒れ込んだ少年。

……何だ、この状況？

・・・

「何だあいつは……」

「それは有里に言っているのか？それとも外壁から上ってきたと思われる男に言っているのか？」

「両方だ！」

ある一室。

大量の機材が忙しく稼働している中、その中央にあるモニターを見て真田明彦は驚愕した。

何せ自身に重傷を負わせた大型シャドウを、初めてペルソナを召喚したと思われる少年があつさと撃破したのだから。

更に、学生寮の外壁から突如として現れた男の方は身の丈ほどある大剣を軽く一閃させただけで2体のシャドウを撃破した。

次から次へと変動していく状況に、モニターを見ていた真田はもちろん、その真田に問いを投げかけた桐条美鶴も驚きをあらわにしたり、その場に同伴していた幾月修司も愕然としていた。

「兎に角、屋上へ行くぞ！！」

有里と呼ばれた少年……先程ペルソナを召喚していた少年が倒れた。

恐らく初めて召喚したことによる負荷からだろう。

今すぐ屋上へ行つて彼を病院へ連れて行かねばなるまいと、真田と桐条はすぐさま屋上へと急行するのだった。

・・・

「起きて！起きてったらー！！」

凄い勢いで少年をゆすっている。あ、脅しているとかじゃなくて物理的にな。

むしろそこまで激しく揺さぶると体に毒なんじゃないかな？ここは動かさない方が……。

「あのー、何だ？御愁傷さま？」

「もう、そんな事言ってる場合じゃないでしょ！誰だか知らないけど、救急車とか呼んでよ！」

「おーけー落ち着こうか、今は影時間なうだ、そんな事は無理だ」

「でもこのままじゃ有里君は！」

何だこいつ、初対面のくせに遠慮知らずだな。

でも多分これはペルソナを覚醒させた事による副作用みたいなものだろう。

いつ起きるか知らんが死ぬ事はないさ。うん。

「ホント！？」

「ホントホント、ボクウソツカナイアル」

とか何とかのんきな言葉の応酬をしていたら、さっき俺が尾行していた短髪のスポーツマンな人がバタバタとやってきた。

「無事か!？」

その言葉を言うならシャドウが居た時にここに来るべきだったと思うんだけど、部外者だから何も言わない事にする。

「影時間が明けた後、すぐに病院に連れて行きましょう!」

「大丈夫だ、医者はすぐに手配する」

スポーツマンに続いてクールビューティーな女性が。
何だ何だ、話についていけないってばよ。

そんな訳で俺はそそくさと退散しようとしたのだが。

「待ってくれ、少し話をしていないか？」

そのクールビューティーな女性が話しかけてきた。

しまったなあ、興味本位で着いてきたらこれだもんなあ。

なんか面倒くさそうだ。間違いなく面倒だ。

「僕はジロー・タナカ!もちろん偽名です!趣味はストーキングです!もちろん嘘です!今日も黒い化物に追われていた短髪のおにーちゃんを興味本位でおっかけてたらこんな所にやってきました!これはホント!」

特技は気配を絶つこと！これはデマです！好きな物はリング！嘘じゃないよ！嫌いな物は梨！ホントだよ！さあて問題です、僕は嘘を何回ついたでしょうか！！文脈自体は全て事実ですので深読みしないでいいですよ！おっと良い子はもう寝る時間だからおやすみなさい！！」

「ちょっと待……！！」

アーアー、キコエナァーイ。

俺は有無を言わず屋上から飛び降りた。

「「！？」」

何か聞こえた気がしたが、知らん！

・・・

「……何だったんだ」

「……変わった人でしたね」

こちらの事情を話す前に逃げられてしまった。

真田明彦は新たな戦力を取り逃がしてしまった事に後悔し、岳羽ゆかりは茫然としている。

その一方で、桐条美鶴は何やら思案顔をしていた。

「なあ、明彦。さっき黒い化物に追われていた短髪の男を追いかけていたと言っていたよな？まさか明彦の事が……？」

「……全く気付かなかった。」

いくら俺が怪我をして逃げるのに手一杯だったからと言って周囲にも気を配っていたのは事実だぞ」

「それをかいくぐった上に、あの様子を見る限りでは普通のシャドウは歯牙にもかけないと言った様子だ。」

……あの男、かなり強いな」

「あ、そう言えば影時間に関しても知ってる風でしたよ」

意識の無い少年、有里湊を介抱しながら岳羽が真田と桐条の会話に混ざる。

突然倒れた有里に慌てながらも、先程の大剣を持った男との会話をしっかりと把握していたようだ。

「……本当か？」

「はい」

桐条は岳羽の言葉に再度問いかける。

自分たち以外にも影時間の事を知っている人間がいたとは思わなかった、といった表情だ。

確かに、影時間もシャドウも、ましてやペルソナ使いを知る者は滅多に居ない。

しかし、あの反応を見る限りでは厄介事は御免被ると言った様子だろうか。

だが屋上から飛び降りると言うのも人間技とは思えない。

となるとやはりあの男もペルソナを扱える存在だと考えても差支

えないだろう。あの場では使っていなかったが。

「……出来れば、あの彼も仲間に引き入れたいところだな」

桐条の言葉に岳羽は少し眉をひそめながら口を開いた。

「あの、彼「も」って言う表現は有里君も仲間に引き入れるって事ですか？」

「……出来れば、な」

「そう、ですか」

先程の戦いを見ればわかるが、遊びではなく命がかかる。

そのような戦いにホイホイとペルソナに適正があるとはいえ一般人を引き入れようと言うのは如何なものか。

「人の為」という大義名分があるとはいえ、岳羽は桐条の強引さをどこか不審に思っていた。

・・・

「ハア、なんだか面倒な事になりそうだ……あ、腹減った」

我が根城たるやつすいボロアパートへと帰還した俺は、大剣と2丁の拳銃を床に置きベッドへダイブした。

飯は……後でコンビニ行こう。

「天然のペルソナ使い……か……」

探した事も無かったしそもそも考えた事も無かった。

研究者達が自身の作品を誇るように人工のペルソナ使いと連呼していたから薄々天然も居る気がしていた、と言うのはさっき述べた通りなのだが。

居たところでそれがどうしたという話だし、はっきり言ってどうでもよかったつもりだったんだがなあ……。

しかしいざ目の前にそれが現れるとついつい着いて行っちゃまった。

「つーか今日は変な日だったな」

ペルソナ使いに大型シャドウに、そして何より一瞬感じた死神の力。

「ありゃ一体何だったんだろ」

思い出されるは、10年前。

火の海に沈む研究所と、それを背景に橋の上で対峙した俺と死神。

俺はあの時、完膚なきまでに敗北を喫した。

後は止めを刺されるのを待つのみとなったはずなのだが、それを救ったのが一体の対シャドウ用兵器。

力尽き薄れゆく意識の傍らで、最後に視界にとらえたのは当時の俺と同年代位に見えた少年だった。

そして目を覚ますとまた白い部屋で。

今度は転生をしたわけではなく単に生き永らえただけ。

あのとき感じた力を思い出すと、自然と当時の状況が想起されてなんかム力つく。

「まあ何だ、多分あいつらとはまた絡む事になるんだろうし、あいつらの近くにいたら何かわかるかも」

まどろむ意識の中で、飯食ってないと言う事実を思い出すものの睡眠欲に抵抗出来ずにそのまま身を任せる事にするのだった。

許さんぞ神イイ！！（後書き）

ちゃんと完結も出来ないのに次から次へと俺はいつたい何をしているのだろうか

D M Cのダンテさんのセリフ借りました。武器とかも似たような装備だけど武器に名前は無いです

さりげなく小さな訂正。

存外に良い人だった（前書き）

とりあえず書きためていた分だけ投下。

存外に良い人だった

・・・

翌朝。

俺は学生鞆を取り出して自身の所属する高校……月光館学園へと向かうモノレールに乗っていた。

正直タルタロスに落ちてるお金をねこばすることで生活も出来るので（影時間が無くなる日が来ると思うとゾツとする）学校に通う気はあまりなかったのだが、よくよく考えるとタルタロスはここ月光館学園から出来ている。

となるとこの学生になっておいた方が深夜このあたりをうろついていたって怪しまれにくいだろう。いや、怪しいは怪しいが未だマシってレベルだろうか。ついでに補導されるかもしれないけど。

（今更だが、月光館学園って桐条グループが創設したんだよね……）

よくよく考えると、俺をこんなのにしてくれた奴らが作った学校に通っていると言う事が。

（それに、昨日のペルソナ使い……）

どうにも気になる。

ペルソナ使いと言えば桐条と言う方程式が俺の中で出来てしまっている為、あいつらも桐条にかかわっている気がしてならない。

そしてあれが学生寮だと言う事を考えると……。

（ヤバいな、髪の毛黒く染めてきた方が良かった）

全然気にしてなかった。ここは桐条の手の中なのに。

いや、まああの研究所の連中はまとめてくたばったらいいし多分敵と言うわけでもないんだが、桐条が俺を連れ戻そうとするのなら敵対関係になる事も辞さない。

でも正直めんどくさい。

（あ、でも学生証とかの証明写真も今のまんまだしあれだな、抵抗は無意味だな）

ここに入学する際、偽の経歴を提出したのだがその時の証明写真も今の髪の毛のまんまで通ったからな。校則が緩いのはありがたい。

あれこれと思考しているうちにいつの間にか駅に到着したようだ。

……無駄な抵抗をするのも面倒なので、素直に学校へと足を向けるのだった。

・・・

ここは1-A。俺の所属するクラスである。

飯も食ったし（授業中に）ボーっとしていたのだが、何やら上級生が……見知ったクールビューティーがずかずかと教室に入ってきた。

……やっぱり来た、とは思ったのだが。

「昼休みに失礼する。君が里峰竜児君か？」

「イイエ、僕はタロー・タナカ」

「おや、ジロー・タナカではなかったのか？」

「ニーサンを知ってるのですか？実は十年前から行方をくらませているんです」

「ほほう、君に兄弟はいないと経歴には書いてあったのだが……」

（詰んだ！）

いくらなんでも早すぎる。

そのうちここに来ると思っていたのだが、今日の昼休みに来るとは思わなかった。

それに経歴？そんなのがわかるのはそれこそ桐条の手の者じゃねーと……ってそれこそ桐条の手の者ってことだろ。

「その経歴は敵を欺くための物なんです」

「ほう、入学する為の経歴を詐称するとはな……詳しく話を聞こう、屋上へ行こうか」

「あばばば」

俺の返答を待たずして俺の首根っこを掴み無理やり引つ張るクルビューティー。

閉まりゆくクラスの扉から聞こえてくるのは「何だあいつ美人からの御誘いか？」とか「うらやまけしからん」とかいう怨嗟の声だった。

そしてやって来ました屋上。男女が屋上というシチュだけ見ればリア充になった気分である。

「それで、話ってなんですか？心に決めた人がいるので告白はお断りですよ」

「ふふ、白々しいな……昨日の事についてだ」

「やっぱりか……流石に昨日の行動は軽率すぎたな。
まあ別に隠すような事でもないしいいか。」

「それよりも俺はあんたの名前を知りたいんだが？一方的に俺の名前ばっか知られてるのは癪だ。」

「一応自己紹介しておくが、月光館学園1年の里峰竜児だ」

「おっと、そういえばそうだったな……失礼した、私は桐条美鶴。
今度の生徒会選挙に生徒会長として出馬するつもりだ、よろしく頼む」

桐条……美鶴……？ってまさかとは思うが……。

「……桐条、鴻悦の……孫？」

「ッ……祖父を、知っているのか……？」

「跡取りは確かに必要だもんな、て事はあのジジイの孫なのだろう。
やっぱり桐条の手の者……と言うか本人だった。」

「とはいえこいつは桐条鴻悦ではない。」

「敵対するか中立の立場をとるかはこのいつの態度次第。」

「しかし桐条鴻悦の孫とは予想以上の大物だった。
そしてそれが天然のペルソナ使い（多分）とは何の因果だろうか。」

話をまとめるのは後でも出来る。そう言う事で桐条の質問に答える事にしよう。

「そうだな、ある意味では俺の親になるのかもしれない。
俺をこんな体にくれた親って意味ではな」

「!？」

……どういうことだ？良ければ話を聞かせてほしい」

「何のこっちゃない、対シャドウ向けの兵器として俺の体は隅々までいじくられただけの事よ」

元々ペルソナに対する適正があつた俺がなにをされたかと言うと、人体改造とでも言えはいいのだろうか。

御託を並べても仕方ないので一言で言えば人間兵器になったってことだな。

「ッ……！」

俺の言葉に息をのむ桐条。多分桐条鴻悦のしてきた事の全容を把握しきれていないのだろう。

あの実験は火の海に沈んだのだから、あの時の事に関する資料のサルベージは難航するはずだ。

となると当然桐条の知らない事柄等山ほどあるに違いないのだからそれは仕方のない事だ。

「いや、まあそんな事はどうだっていいさ」

「どうだって良いって……君は私を恨まないのか!？」

「お前を恨んでどうする？お前を殺していい、とお前が許可してくれるのか？」

「それは……済まないが、私は私の祖父がしでかした事の償いをしなければならぬ。

そのすべてを片づける事が出来たのなら……私は君に全てを委ねよう、それでは駄目か……？」

何だそれ、愛の告白みたいだな。

いや別に桐条美鶴に関してはどうだっていいし、桐条鴻悦の事も別にどうだっていい。

聖人君子と言っわけではないが別に俺は桐条の事など恨んではないのだから。別について言いすぎだろ俺。

「だから言ったる？別にお前の事を恨んじゃないない」

「……どうして、そのような事が言えるんだ？」

「どうしてって言われても……（なんでこの人のリボンこんなでかいんだろっ）」

正直めんどくさい。

俺の思考はどんどん逸れる中で桐条は勝手に自己嫌悪に陥っている。

……昼休みももうすぐ終わりそうなので適当に切り上げる事にしようか。

「恨もうが恨むまいが俺の自由だろ。俺はもう自由なんだ、自主性を重んじる月光館学園的に考えたら桐条を恨まないと言う俺の選択

を尊重してもらいたいね」

じゃあの、と俺は軽く手を振りながら屋上から去る。

桐条美鶴は、最後までうつむいたままだった。

時は少し飛んで放課後。

クラスメイト達の恨みのこもった視線を無視しつついったん部屋に帰る事にする。

……つとその前に購買行ってくるか。カツサンド余ってたら買う。

ここの購買は昼休みに売れ残った食べ物割引になったりするから部活生達に人気である。

その恩恵に俺もあずかろうと言う事で購買でパンを何個か買おうと思ったのだが。

「あ、あなたは……」

「あん？……何だお前か」

そこには俺と目的を同じくして購買に居たのだと思われる、昨日出くわしたカーディガンを纏った女の子がいた。

と言っても俺とその女の子の接点と言えばそれくらいしかないわけで、俺からしたら「挨拶すべきか否か迷う」程度の間柄でしかない。

それ故に簡単な反応を返したと言う事で俺の興味は購買で販売されている物品へと移って行った。

「ちょっと、それだけ！？反応薄すぎでしょ！こっちは同じ学校の生徒って事で吃驚してるんだから！」

「あ？あーまあ落ち着け、話なんざどこでも出来るだろ？俺はそこで売れ残ってるカツサンドを買いにき……」

何と、そのカツサンドが眼の前で別の生徒に売買されてバイバイしてしまった……。

「……おばちゃん、メロンパン2つ下さい」

「はいよー」

とりあえずさっさとパンを買う事にした。

「……何か、ごめんね」

「いや、いいさ。ホントにカツサンド食べたいなら昼休みに購買行くし。」

それよりも、コーヒーと紅茶どっちが好き？」

「え？どっちかって言うと紅茶だけど」

「へー、俺はコーヒー派だなあ。ほら、ポロニアンモールにあるシヤガールのコーヒーとかめちゃうくちゃ美味いんだぜ？1回しか行った事無いケド……。」

あ、おばちゃんコーヒーと紅茶も一個ずつくれ」

「コーヒーと紅茶ね、毎度ありー」

小銭をおばちゃんに渡してコーヒーと紅茶を受け取ると、紅茶とメロンパンをその女の子に渡す。

「へ？いいの？」

「あ？お前も何か食べ物買いに来たクチなんじゃねーのか？」

「ええつと、消しゴム無くなりそうだったから買いに来ただけど、丁度あなたが来たからそっちに目がいつちゃってたんだ」

「あらら、俺の勘違いかよ。まあ腹減ってねえなら他の奴にくれてやつても良いから、じゃあの」

何にせよ俺は今からこのメロンパンを食わなければならない。
さりげなく話を切り上げてしれつとこの場を立ち去るのだが、どうやらその事に気づかれてしまった。

「あーいやいやそうじゃなくて、どっか静かな場所行かない？ちよつと話がしたいんだけど」

「仕方ないなあ……モテる男はつらいぜ」

「はいはい、馬鹿言っでないで着いてきなさいよ」

十中八九と言うか十中十（造語）と言うか百発百中で昨日に関しての事なんだろうな。

逃げてと同じ学校の生徒なのでやっぱり面倒は避けられない。
そういうことで素直に着いて行くことにした。

……はい、また屋上です。

とりあえず屋上の手すりを背もたれにして座ることにした。
メロンパンは売れ残りとは思えないほどの味で、周囲はサクサク

で中はしつとりと言う素晴らしい食感だ。

購買のパンのレベルの高さに舌鼓を打ちながら女の子が口を開くのを待つ。

「そう言えば、昨日は助けてくれてありがとね。私は岳羽ゆかり、よろしくね」

「気にすんな。俺がいなくてもあの少年がなんとかしただろうよ。俺は里峰竜児、今後ともヨロシク。

ああそつだ、少年は無事か？」

「ええ、お陰さまで……てか、あなた少年って言ってるけど、有里君はあなたの先輩にあたるんだからもうちよつと良い表現出来ないの？制服の刺繍見る限りじゃあなた1年生でしょ？」

「じゃ次からは有里先輩って言っよ。岳羽先輩？」

「う……付き合い長いわけじゃないけど、何かあなたが先輩って言っのは違和感」

「なんて我がままな女だ！これだから女って生き物は！」

「ちょ、ちよつと！私の反応だけで女性を一括りにしないでよね！」

メロンパンをもさもさと食べながら岳羽ゆかりは憤慨した。

てーか何か話あるんじゃないのか？いや、俺が話そらすのが悪いんだけどな……。

武器の手入れもしたいから、さっさと会話を終わらせて帰りたいところだ。

「まーいいや。なあ、何の用？昨日の事か？

それなら桐条美鶴が概ね把握してると思うからそっちに聞いてほしいんだが」

「……やつぱり、あの人あなたと接触したんだ。なんて言ってた？」

「いや、何も？ちよつとした世間話」

「そうなんだ……」

一般人には中々ヘビーな過去話をした、なんて事を説明するのもあるから適当にお茶を濁す事にする。

そつえば岳羽つて性……どつかで聞いたような……。

俺と関係がある性は大抵が研究者だ。誰だっけか……あ、思い出した。

岳羽詠一朗だ。シャドウ研究の主任かなんかの。

俺自身被験者という立場だったからホイホイと話しかけられる相手でもなかったからあんまり覚えてないけど、ちよつとだけ話した事があるから思い出せた。

桐条美鶴の件もあるし、まさかとは思うがこいつも岳羽詠一朗の娘か何かなのだろうか。まあいいや。

「話ってそれだけか？」

「うん、まあね。ごめんね、これだけの事なのに紅茶とかおごってもらっちゃって。」

後最後に桐条先輩あなたを仲間に勧誘したいみたいな事言ってたんだけど、それに関しては何か言ってた？」

「あん？なんだそりゃ初耳だぞ」

まあ俺の事について責任感じてた風だし、そんな事頼めるはずもないか。

あの人が何か言う前に俺がその根底を覆してしまった感があるしな。

「あれ？そうなんだ、それなら良いんだけど……もし桐条先輩が勧誘してきても、嫌なら嫌って言うてくれていいからね？」

「お前だって戦力が増える事に越した事は無いんじゃないのか？まあそうなったら断るけどさ、面倒だし」

「そんな理由で断るの！？」

……確かにあなた強いから仲間になってくれたら心強いけど……仲間になるかならないかはあなたの自由だからね」

自由、か。

「……何か悪いな、気を遣わせたようで」

「良いの良いの。メロンパンの御礼って事で」

あれだな、どうやら敵対するわけでもないみたいだ。

桐条美鶴の方もあの実験の尻拭いをしているといった雰囲気だったし。

シャドウを撃破するという目的も同じだ。

そして何より、あの桐条に恩を売れるとあらば、手伝っても良い

かもしれない。おもに報酬目的で。

銃弾を入手するのも一苦勞だしな。あの銃は対シャドウ用に作られた特製だから。

「まあなんだ、よっぽど切羽詰まってんなら手伝ってやらん事も無いぞ。」

どうせ影時間の時はもっぱらシャドウとやり合ってるから」

「はあ!？」

何に對しての驚きなのだろう。手伝う事なのか毎晩シャドウとバトツてる事に対する物なのか。

まあどっちでもいいか。そんな訳で昼休みの時と同様に俺は再び軽く手を振りながら屋上を後にするのだった。

...

影時間が始まる。

機械は止まり、辺りは暗闇に染まり、そこを照らすのは不気味に光を宿した月だけだった。

昨日は街中でシャドウがわらわら居たからそのまま戦闘に突入したが今日の目的はシャドウだけではない。

「今日はタルタロス行つとくかなー、お金も減ってきたし」

俺の主な収入源。それはタルタロスである。

一応奨学金も貰つてはいるものの成績を保つ事を条件にしている為無暗に手をつけたくないと言う事で貯めている。まあまだ一月目なんだけど。

兎にも角にもタルタロスでネコババ生活をしなければ今日の食

ぶちすら怪しいと言うのはどういいうわけだろうか。

十中八九銃弾を造るのにかかる費用だな……。いや、シャドウが落とす材料を色々いじくって造るから材料費はかかんないんだけど……。

「まーたタカヤ達に弾薬を頼まねばなるまいか……。あいつらマジボツタくるからな」

ストレガと言う組織と言うか一味……と言うか人工ペルソナ使いとしての元モルモット仲間達が俺の弾薬を造ってくれてる。対価として結構な金を持っていきやがるが。

「何度も言ってるでしょう、私達の仲間になれば武装は無料で進呈しますと」

「うおお!？」

俺がぶつぶつ愚痴りながらタルタロスへ向かいながら歩いていると、話題の中心であるストレガのリーダーであるタカヤが声をかけてきた。ストレガの残り二人……ジンとチドリもタカヤの後ろに着いてきている。

半裸の白髪ロン毛と言う、濃すぎる外見も相まって夜の光に照らされるタカヤは一段とホラーだ。マジでビビった。

「……何か失礼な事を考えましたか？」

「おうよ、半裸でうろつくな職質されんぞってよ」

「またまた御冗談を……ここは警察などが介入できる空間ではあり

ません」

「てめーの私生活での服装を鑑みてから物を言いな」

「くくく……それもそうですな」

とまあこんな具合に同じ釜の飯（流動食）を共にし、苦楽を共にし、命を賭けて桐条から逃げたと言う事も相まってそれなりに仲良くやってはいる。

何か別に俺はシャドウを殲滅したいだけなので、タカヤ達とは目的が違う為何となくストレガの一味には入っていない。それでも金さえ払えば弾丸を造ってくれるあたりありがたい限りだ。

「それで何や竜児はタルタロスにでも行くんかいな」

「おう、昨日行くつもりだったんだがちょっとしたアクシデントがあつてな」

「……アクシデント？」

するとタカヤの背後に控えていたジンも口を開くのでそれに答えるところ、続いてチドリが疑問の表情を浮かべた。

「おう、俺ら以外にもペルソナ使いが居るみたいだな。それも天然っぽい」

「「！」「「ほう……それは面白い」

ジンとチドリは少し驚いた様子だったが、タカヤは楽しそうにしている。

まあ確かにこいつらとあいつらはいずれ激突する気がするなー。
多分目的が正反対だもん。

それをいち早く察したのだろう、タカヤはまだ見ぬ敵に武者震い
をしたと言ったところか。

やっぱただ淡々と目的に近づくよりも障害があつた方が楽しいも
んな、刺激あつてこそその人生だ。

「別にそいつらの肩入れする気はねーが、あいつらはお前らと違っ
てシャドウを倒したいらしいから、気が向いたらあいつらの手伝い
するけど構わねえか？」

ストレガの一味ではないが、親密度で言えばあいつらよりもこい
つらの方に思い入れがある。

それ故に今こいつらとあいつらが敵対するならまごうこと無くこ
いつ等の味方をするつもりだ。

とはいえ現在それが現実になっているわけではないから、こうし
てあいつらに肩入れする事の許可を求めておく。

何の相談もなしにあいつらのところに行くのも何か薄情な感じがす
るしな。

「ふむ……私は別に引きとめはしませんよ。ただその天然のペルソ
ナ使い達に関する情報を少々頂けるのならば」

「わしもかまへんで。別にそいつらの肩入れするからうちゅーて竜
児と敵対するわけでもあらへんし」

「……どうでもいい」

どうでもいい。どうでもいい……。
まあタカヤとジンの同意を得られたのなら問題はあるまい。

「つつても必ずしもあいつらと行動を共にする事になるとは限らねえからな？」

あいつらがもっかい接触してこない限りは「

「ええ。正直そこまで期待してないので問題ありませんよ」

ぐぬぬ……。

「……お前らって、何気に俺の扱い酷いよな」

「せやかて大抵の事（物理的な意味で）は平気やないかい。どんな身体しとんねん」

「私はこれでもあなたの不屈っぷりを買っているんですよ」

「どうでもいい」

ぎぎぎ……。

チドリここにきてからどうでもいいしか言ってるねえ……。

「……何か釈然としないがまあいい。多分今回の戦闘で弾薬使いきる心算だから次の分用意しといてくれ。

報酬と一緒に更に次の分の材料は持ってくるから」

「分かりました、用意しておきましょう。それではお氣をつけて」

「おう、じゃあの」

「気をつけてやー」「……じゃあね」

俺達は簡単な挨拶だけすると、互いに別の方向目指して歩き始めるのだった。

存外に良い人だった（後書き）

P3はプレイ済みだしなんとかなる気がする

休むと勝手に面倒を押しつける風潮止めてくれない？

タルタロスの内部構造は日々変わりつつある。

どこまで階層が続いているのか見えないほどに高いそれは、俺の探究心を酷く揺さぶるもので桐条グループから離れた後すぐに上へ上へと目指して行ったものだった。

「今日も行き止まりつと……」

しかし、16階で行き止まりになっているのだ。

上の階へ上るのをさえぎっている柵を破壊しようとするものの、びくともしない。

何か条件があるのかと思ひ色々調べては見たものの、やっぱり何もわからないまま今日と言う日を迎えている。

……10年間、上に行けないってのは絶対おかしいよな。もうさ、いい加減同じような奴ら相手にするの飽きるっての。

「……明らかに100階は越えてるよな……」

俺は一旦下の階を目指しながら歩みを続ける。

タルタロス——すなわち「奈落」と研究者達は名付けたと言うのに天元突破しそうな高さを誇っていると言うのは如何なものか。

……だがまあぶっちゃけこの塔の名前なんぞどうでもよくって……

……！

「お出ましたな、クソ野郎」

今日も今日とてシャドウ狩りに精を出す事にする俺である。

弾薬を使い切る、と言う事で懐から2丁の拳銃を取り出した。

いや、別に無駄遣いするわけではないからな。2、3発につき1、2体は撃破するからな。

ところで、俺は何となくだがそのうちこの柵が取り除かれる気がする。
している。

と言つても昨日今日で一気に情勢が変わったので、ついでに柵も消えるんじゃないかなっていうものっそいアバウトな願望に過ぎないのだが。

しかしもし仮にその願いが成就したとすると、上の階に行けばより強敵が現れる事になるはずでまだ見ぬ強敵達に対して『あれ』も使う事になるだろう。

『あれ』に見合う口径の弾薬が無い為今は使用不可だが、次にタカヤから貰う予定の弾薬に『あれ』用の物も造ってもらう予定である。

「ハッハア!!!!」

正面に見える二体を打ち抜き、背後からの攻撃を前転して回避するとともに背後に向けて数発放った。

そして起き上がる勢いそのままに先程弾丸をぶち込んでやった二体に回し蹴りを放つ事で隙を無理矢理作り出してやる。

足に気持ち悪い感触を受けながらもそのまま体を1回転させシャドウを蹴り飛ばした。

「雑魚はおねえねしてろ、いい子は寝る時間だっつーの!!」

蹴り飛ばした方向にもシャドウ達は群がっていたので背中の大剣を右手に持ち一閃。

言葉に言い表せないような変な色をした体液が辺りに飛び散る。

続いて1、2、3、4、5と周辺に居るシャドウ達を斬り裂きながらも空いた左手で銃撃。

俺は独楽のように回りながら一体また一体とシャドウを仕留めていく。

そうして周囲に居たシャドウ達の数も残りわずかになったところで新たなシャドウが現れた。

「またお前か畜生め」

名も知らぬシャドウ。巨大な体躯に両腕がスピアみたいな感じの奴。

こいつは一切の物理攻撃を通さないらしく最初接近戦で戦おうとして酷い目にあつた相手だ。

そのシャドウはあいさつ代わりに言わんばかりに身体を回転させスピアによる一撃を俺に叩きこまんとする。

「ハ！！物理攻撃が聞かなくても防御は出来るってんだ！！」

対して俺は跳躍。後に回転するスピアの間に剣を叩きこみ無理矢理その動きを停止させた。

銃も剣も効かないならやる事は一つしかない。

「ペルソナ……！！」

死と言う最上の恐怖を受け入れ、自分の中に存在する何もかもを受け入れる。

そうする事で心の仮面はそれを引き鉄に、力と言う弾丸をシャド

ウに放つ事が出来る。

そして俺の背後に表れた俺の^{ベルソナ}中身。

「一発で沈めんど、ケツアルコアトル！……ガルーラー！」

背後に居る翼の生えた蛇は咆哮を一つ放つと共にシャドウに対して暴風をぶつける。

めちやくちやに吹き荒れるそれは、一瞬にして一区画を飲み込みその場に居たシャドウをまとめて消滅させた。

そして残ったのは静寂。

「……なんつーか、もう同じ奴ら相手にすんの飽きたわ」

上の階に行けるようになれと割と切実に祈る俺だった。

・・・

さて、俺の今現在の身分は学生である。

故に毎晩シャドウと戦っているとしても翌朝には何食わぬ顔をして学校に行かねばならない。

流石に大けがとか病気でと言うなら休んでも良いのだろうが、病気はともかく大けがをした理由を問われると面倒になるので月光館学園に入学することになった後からは細心の注意を払ってタルタロスに挑んできた。

兎にも角にも、奨学生として学校には真面目に行かねばなるまいで。

例えばそれが寝坊して昼過ぎになってしまっていたとしても。

俺は寝坊して昼過ぎに悠々と重役出勤し、ボケーっとしながら放課後を迎えたのだが、何やら担任の教師に職員室に呼ばれたと思っただら。

「……センサー、休みの人を委員会に据えるのはどうかと思うんですが」

「俺はちゃんと言ったぞ？委員会なりたくない奴は正直に手を挙げろ」

「それはあれか？手を挙げてない奴が委員会になるって事か？」

奴の名は吉岡。俺がこの月光館学園に入学するにあたって後見人となってもらっている男だ。影時間の適性は無いが、その存在は知っているの俺の武器所持も黙認してもらっている。

そういう意味では感謝はしているものの、それとこれと話が違ってた事で俺は目を見開き目の前の教師を睨みつけた。

しかし俺の睨みを全く気にした様子も無く教師は笑って俺の問いを肯定する。

「exactly、その通りでございます」

俺の意志は無視かふざけやがって。いや、寝坊したのは悪いと思ってるよ？でもさ、委員会決めなんて放課後でもいいじゃない？なんで朝なんだよ？早急に決めないといけなかったの？そんな話昨日はなかったじゃん？

「ふざけないでください。苦学生 of 奨学生は勉強に集中しないと成

績を保てないんです、だからイヤです」

「学校は勉強するだけの場じゃねえ……良いか里峰？
学校つてのは一種の箱庭なんだよ。まあ、言うなれば社会の縮図だ。」

そこで友人を作ったり部活したり委員会に入ったりつてのは社会に入る為の予行演習みたいなもんなんだよ。

つまり、勉強しかできないってんじゃないこれから生活困る事になんぞ？」

「だったら他の奴らにも何かさせるよ！！」

「うるせえ！寝坊した奴が悪いんだよ！！」

「言うに事欠いてそれか！ふざけんな吉岡アア！！」

「吉岡『先生』だ！」

「ふざけんなよ、Mr・吉岡アア！！」

「かたくなに呼び捨てにしたいのな！！良いぜ、表でろ里峰エエ！！！！」

吹いたなクソ野郎、意地でも委員会を撤回させてやる。もしくは再選挙にしてやる。

指をバキボキと鳴らしながら臨戦態勢に入る俺。
対するティーチャー・吉岡も威圧を放ちいつでも戦える状態に入る。

しかし、俺達の対峙はあっけなく終わりを迎えた。

「こら、ここが何処だか分かってるの？」

「はーこ、これは鳥海先生！！恥ずかしいところをお見せしたよう
で……」

どうやら同僚の先生らしい。吉岡先生（一応先生をつける）のリアクションを見る限りでは鳥海先生に惚れているな？

「誰だお前はアア！！」

だが敢えて空気を読まずに声を荒げる。

「職員室にいるんだから高確率で教師に決まってるでしょうが……」

「じゃあ俺は低確率に賭けるぜ！！」

「馬鹿野郎この人はまごうこと無く教師だ！！謝れ！鳥海先生に謝れ！！」

おいおい、鳥海先生があきれた目で吉岡先生の事を見てるぞ。
わっはっはざまあ見ろ！ニヤニヤしていたら俺も鳥海先生にどつかれた。

「ハア……兎に角、ここは職員室なの。静かにして頂戴」

「は、はい……すみません鳥海先生」

「カハハ、尻に敷かれてやんの」

「おめーも謝るんだよ、委員会にぶち込むぞコラ」

謝れば委員会回避出来るのか？出来るんだな？よしそれなら謝ってやるつか。

綺麗なお辞儀と共に謝罪の言葉を職員室に向けて放つ。

「……騒がしくしてすみませんでした」

「分ければ良いのよ、分ければ。こっちだって書類片してるんだから」

「よし、それじゃあお前図書委員な。明日委員会あるから放課後に図書室行つて来い」

「えっ」

ふざけんな。

「どっちにしろ誰かがしなきゃなんねーんだよ、おめーがやれ。今度海牛で牛丼おごってやるから」

ふざけんな！

だけどもあ……海牛に釣られてやるか……。

「……ハア、分かった。

どうせ部活もしてねえし毎日毎日放課後に拘束される訳じゃねえんだろ？」

「そつだな、毎日は無いだろうけどその辺は明日確認してきな」

「はいよー」

職員室つてのは昔から苦手だ。

生徒と言っ立場で職員室に入ると言っのはどうにも場違い感が否めないんだよな。

そんな訳でそそくさと立ち去る。

図書委員……めんどくさいけど引き受けてしまったモノは仕方ない……。

俺は重たい足取りで購買に足を運ぶのだった。

・・・

翌日の放課後。

図書室に行く生徒たちが集まっている。

中には白衣を着た先生らしき人物も居てパツと見そこが委員会の集まりっぽいのでその近くによってみたところ、どうやら正しかったらしい。

と言っか面子は俺が来た時点で全員集まったらしく、先生はようやく話を始められると言っ表情で口を開いた。

「よし、全員集まったようだなー。今日からお前達で図書委員を務めてもらっ。

私は大西だ、担当の科目は化学なのでそっちでも分からない事があれば聞きに来い。

それじゃ、それぞれ自己紹介を……とりあえず最後に来たお前から。立って自己紹介な。

ここは図書館だからなるべく静かに」

俺か。

言われた通り素直に立ち上がり自己紹介を始める。

「1-Aの里峰です。推理物とか結構好きなんでオススメ有ったら紹介してほしいっす。今後ともヨロシク」

全員に聞こえるように、かつなるべく静かにと言う条件を満たしつつの自己紹介。

こういうのは第一印象が大事だからな、変に目をつけられるのもあれなので影をなるべく薄くする事にしよう。

って考えで行った自己紹介だったが無難な感じにまとめたので反応も普通。上出来。

「里峰だな。それじゃ次お前」

……なんかんやで簡単な自己紹介も最後一人。

大西先生の言葉を受けゆったりと立ち上がったのは何やら大人びた感じの女性。

「えと……長谷川沙織です……至らない点もありますが、よろしく願います」

普通の自己紹介だ。

だと言うのに何かあれだな。他の委員の奴らがひそひそと会話を交わしている。

俺の時は別に何も無かったのに。なんだなんだ？

「よし、自己紹介も終わったな。

それじゃ続いて月曜から金曜までの担当を決めるからな。

でも面倒だから適当に振り分けるけど良いか？」

「センサー、私はエリと一緒に良いんですけどー」

「あ、私も友達と一緒にしてほしいんですが……」

する生徒達の何人かが友達同士で一緒にいたいらしくその辺の融通は利かないのかと口を開いた。

確かに友達同士で図書委員になったのに違う曜日に振り分けられたらあれだもんな。

まあ別に俺は友達居ないから知ったこっちゃないけど。

「じゃ、誰かと一緒にになりたい奴が先に決める。ちなみに担当は一人につき週二回だからな。」

それで、残った奴は適当に振り分けるが文句は無いか？」

俺は別にないです。

無言で一回頷く。他の面子も特に何も無いようで異論を唱える者は居なかった。

そうして次々と担当の曜日が決められていく。

「……じゃ、長谷川と里峰。お前らは火曜と木曜な」

「「はい」」

火曜と木曜か。いやしかし毎日じゃなくてよかったわ。

流石に毎日委員会に顔を出すほど暇じゃない。

いや、実際は暇だけどもんどくさい。

「よろしくね、里峰君」

するとなんだ、長谷川さんが微笑みながら俺に声をかけた。声をかけられた俺は素直にそれに対する返答をする事にする。

「こつちこそよろしく。長谷川さん」

物腰柔らかな人だ。

昨今の女子高生にはこうした大和撫子的なあれが足りない気がする。

しかしあれだな、この学校の女子はレベル高いなオイ。

でも肉体年齢が15歳でも精神年齢は既に三十路を越えて四十路に近付いてるからね。

精神の方が枯れてくると自然と肉体も枯れてくると言うか……。

まあそんな事はどうでもいい。

……つーか四十路にもなって銃とか剣を振り回してハイになっているって考えると黒歴史街道まっしぐらだな。

いやいや！前世の精神年齢はノーカンだ、ノーカン！ノーカン！

俺が頭の中で葛藤を繰り広げているうちに大西先生は最初の委員会の集まりですべき最低限の事を終えたようで、俺達を解散させるべく小さく声を上げた。

「それじゃ、今日の所は解散。今日は金曜だから金曜担当の奴だけ残れ。」

図書委員の仕事について実践しながら教えるから。月曜担当の奴は来週の放課後またここに来い、良いな？」

「「はい」」

「よし、それじゃあ解散。お疲れさん」

大西先生の言葉と共に生徒達が図書館の出口に向かって歩き出した。

俺はどうしようか、とりあえず何か面白い小説でもないか探そうかな。

適当に本棚に向かい、面白そうなタイトルの本を適当に探す事にする。

「あれ、里峰君は帰らないの？」

すると長谷川さんがいつまでも帰ろうとせずに本棚をいじくっている俺に対して疑問を抱いたらしい。それはお互い様な気がするがまあいい。

「いやさ、何か面白い小説でもないかなと思ってな。それに図書委員の仕事を実践しながら教えるつってたし」

「なるほどね。里峰君って真面目なんだ」

「俺から真面目を取ったら骨しか残らない程真面目だよ、こう見えて」

「ぶふつ。何それ……あ、そうだ。私のお勧めで良かったら紹介しようか？」

この人も本が好きらしい。

かくいう俺も本は好きだったから保健委員か図書委員なら図書委

員って事で選んだんだけど。

とはいえ本が好きだからと言って図書委員をしたいわけではない。

それはともかくどうせ図書委員の仕事も常に忙しいってわけじゃないだろうから合間を縫って本でも読もうかと考えている。

それ故に長谷川さんの申し出は非常にありがたい。

「そりゃありがてえ。ジャンルは？」

「里峰君の好きな推理物。こう見えて私も結構本読んでるんだ」

「ほほう。それは期待できそうだ」

長谷川さんが少し自信ありげな表情を浮かべるのでそれに釣られて俺も楽しそうににやりと笑う。

すると、長谷川さんは少し申し訳なさそうな表情に切り替わった。

「えっと、読んだことあったらごめんね」

「それはそれで色々とな話題が出来そうでありがたいもんっしょ」

どっちにしる本を紹介してくれると言う行為そのものがありがたいんだよワトソン君。

「ふふ、それもそうね。それじゃあ期待に応える為にも何作か紹介しようかな、ホームズ先生？」

長谷川さんの意外なノリの良さに小さく笑いながら、先導する長谷川さんの背中を追う事にする俺なのだった。

休むと勝手に面倒を押しつける風潮止めてくれない？（後書き）

次々と女キャラが出てきてはいますがハーレム等は一切ありませんのであしからず

ひっそりとケツアルコアトルの容貌を修正。P3の太陽に出てくるケツアルカトルとはまた別なペルソナな感じでおなじやす

仲間が増えるよ！やったねry（前書き）

里峰竜児君のケツアルコアトルは刑死者です。
今書いた事に特に意味は無いです。

仲間が増えるよ！やったねry

初めて天然のペルソナ使い達と遭遇した夜から5日程が経過した。特筆すべき事など何もなく、ただただシャドウ達を殺しつくす日々だ。

これはまあ10年前から繰り返している事なので別段気にするような事でもないけど。

そして今日はストレガの連中に依頼した武装を受け取る日と言う事で俺は宵闇に染まったポートアイランドを歩いている。

普段は影時間になってから外を出歩くのだが、今日は散歩したい気分だったからなんとなくな。

けどまだ影時間じゃないし職質とかされたら困るので、武装は懷にしまつてある2丁拳銃だけだ。

大剣さえなければ職質はされないだろう。うん。

こつというのは堂堂としていれば何も問題は無いのだよ。

そうしてのんびりと歩いていると、気が付いたらポートアイランド駅に到着していたのでとりあえずベンチに腰を落ち着け、ボケーっと空に浮く月を眺めていた。

「もうそろそろか……」

影時間が訪れる。

基本的にタカヤ達との待ち合わせ場所は決まっていない。

何せあいつら神出鬼没でどこにいるかも分かったもんじゃないからな。

ボーっとしてたらあいつらが勝手に来るんだから吃驚する。
一体どうやって俺を捕捉しているんだか。

「それも私達の仲間になればお教えしますよ」

「……職質されんぞ半裸ア」

噂をすれば影がさす、とはよく言ったものだ。
タカヤ達が来ると同時に影時間が到来した。

周辺を歩いていた飲み屋帰りの酔っぱらいリーマンやいちゃこら
していたカップル、深夜にこの周辺を跋扈している不良。

そのことごとくが棺桶に変貌し、人工の光で灯されていたポート
アイランド駅は一気に自然の闇に染まる。

そんな中で堂々と歩いてきたタカヤ達は多分、影時間前からあ
して堂々と歩いていたはずだ。

……半裸にゴスロリにメガネの3人組。正直不自然だよな。

正直な話、一度捕まんないと分からないんじゃないだろうか、自
分達が怪しい存在だと言う事に。

「……何やまた失礼な事考えとるんとちゃうか」

「少なくともタカヤに上着を着せようとしないう前らに不信感を抱
いているのは間違いないぞ」

「……わしかてこないな恰好する奴に何も言わんわけあらへんがな」

この中で唯一まともな服装なのはジンだけだな。

やはり3人の中では一番常識人なのだろう。それ故の苦勞と言うものか。

見た目だけ見たらキワモノなタカヤ（中身もさながら）に、やっぱり見た目だけ見たらキワモノなチドリ（なまじ似合ってるから困る）を制御するのは難しいんだろうな。御愁傷様です。

「……まあなんだ、がんばれ」

「貴方達、相当失礼な事を考えてますね？」「……何かム力つく」

「そう思っんなら服装を考えろ（考えんかい）！！」

俺、正直こいつらと一緒に行動してるところを見られたくないんだけど！？

基本的に合流する時間は影時間だから良いけどさ……。

まあいい、落ち着こうか。そしてとりあえず話を進めよう。

俺は懷から報酬の金と次の依頼に使う、シャドウが落とす弾薬の材料を取り出した。

「とりあえず、今回の弾薬の分の金と……こっちが次に依頼する分の材料だ。」

次は『狩人』ともやり合う心算だし、だからそれに合わせて『あれ』に見合う弾薬を頼む」

俺の言葉に対してタカヤは興味深そうに微笑んだ。

タカヤの俺を見る視線には「勝てるのか？」と言う疑問と興味が乗せられている。

「ほほう……あれとまた対峙するおつもりだと……以前死にかけの所を助けた事をお忘れですか？」

「次も助けられるとは限りませんよ」

「何や竜児自殺願望でもあるんかいな」

「……馬鹿ね、死にたいならそう言えば良いのに」

「言いたい放題だなオイ。一人くらい「イイねイイね」とか乗ってこいよ！！」

「うるせえ！あの時は事情が違ったんだよ！！」

「そうだ。」

「あの時と今では状況が違う。」

「成長もしたし、経験も得た。」

「別に『狩人』を仕留めたいわけではない。」

「俺がどのくらい強くなったのか、知りたいんだ。」

「はっきり言って勝てるとは思わないが、至少くらい良い勝負をするとは思っている。」

「依頼は依頼ですし、報酬さえ頂ければこちらもそれに応えますが」

「……」

「流石に次は助けられへんで？わしらかて慈善事業でやっとなんとちゃうからな」

「せいぜい頑張ることね」

「ま、確かにお前らの言う通りあれば真正正銘のバケモンだからな。俺だつて死にたいわけじゃねえけどよ、この10年で培った力の実感が欲しいんだ。」

タルタロスも先に進めないし、俺自身どのくらい強くなったのか分かったもんじゃねえしな」

この10年、ただただ強くなる為に戦い続けた。裏を返せば、俺には戦いしか残っていなかった。それはすなわち、力の証明でしか俺の存在理由が示せない事に他ならない。

すると、タカヤ達は何やらこちらをじっと見つめている。今度は先程のような呆れた様子ではない。

「竜児……やっぱお前、あの時のことまだ気にしとんのか？」

「……もうそんな終わった事なんぞ気にしちゃいねえよ。

俺が戦うのは、死により近づく事で生を感じる為だ」

「せやかて、お前は……」

「ジン」

俺が口を開く前に、タカヤがジンを止める。

ジンは納得していない表情を浮かべるものの、渋々と引き下がった。

するとタカヤは少し申し訳なさそうに俺に対して謝って来る。

「すみませんね、うちのジンが」

「いえいえ、犬に手をかまれたと思えば気になりませんよ」

「コラ竜児イ！誰が犬やて？！」

「はっはっは！まア何だ、依頼の件頼んだかな」

「ええ、しっかりと引き受けましたよ。それではまた今度」

「おう、じゃあなお前ら」

タカヤから弾薬を受け取ると、用は済んだと言わんばかりにタカヤは踵を返す。

一方でジンはさっきの犬発言を根に持っていたようで、憎々しげな視線を送りながらもタカヤに追従する。その前に俺の方を振り返って一言。

「覚えとれよ竜児……」

「はいはい」

相手取るのも面倒なのでぶらぶらと手を振る。
するとチドリがジツとこちらを見続けていたので俺は思わず首をかしげた。

「どうした？チドリ」

「……なんでもない、じゃあね」

「……ん、じゃあな」

良くわからない。

チドリもタカヤ達の方へ歩いて行ったので、無人と化したポート

アイランド駅には俺だけポツリ。

どうしようかな、弾薬も得たからシャドウ達とも戦える。

でも何だ、そういう気分じゃなくなってしまった。

「歩こうかな」

そう言う訳で、拳銃片手に散歩を開始。

ところで、先日の一件は特殊だから除外するとして影時間中の街中にもシャドウは一応現れる。

普段はタルタロス内にならたくさん居るのだが、街中にもしばしば現れるのだ。

それで先日はなぜかあり得ない位大量発生していたのだが、あれは一体何だったのだろうか。何かの兆候？

駅前の映画館のラインナップを確認してみたり、路地裏の壁に描かれた落書きを荒らしてみたり。

時計も動かないから不便だなあと思いながら無人の街中を散策する。今日は先日と違ってシャドウも大人しいらしく、ものっそい静かだ。

それが逆にホラー感を増長している気がするのだが、こういう雰囲気はもう慣れた。

ホラー苦手な奴にはこの静寂は耐えきれないだろうなーとのんきな事を考えていると、なにやら電気の消えたコンビニからすすり泣く声が聞こえてきた。

お化け？お化けですか？そんなもん居るわけないじゃんと自分で否定しながらもコンビニの自動ドアを手動で開く。

「なんだよこれえ……意味わかんねえよ畜生……」

そこにはすすり泣く帽子をかぶった髭の男が。
俺はその様子を若干引きながら声をかけてみる。

「……何やってんだよ」

「うおお！？悪霊退散すみませんお金無いです許してください！！」

影時間ではたまにある出来事だ。

適性の無い奴が象徴化せずに影時間内を彷徨うと言う事が。

見つけたらなるべく助けてやる事になっている。

どうせ適性の無い奴は影時間が明けると大体の事を忘れてしまい、
残った記憶も夢か何かとして処理するため俺の事を覚える事は無い
からな。

ていうか銃刀法違反してるのを覚えられると困るし。あれ、そう
いう問題でもないのか？

俺はあきれたように溜息をつく、危険人物ではない事をアピ
ルするために両手を挙げながら落ち着けるように諭す。

「俺のどこが悪霊だったんだ。良く見る両の足で立ってるっての」

「……本当、だ」

それで納得しちゃうのかよ、案外余裕だなお前。

まあなんだ、今日はシャドウも居ないし適当に辺りを警戒して影時間が明ける直前に立ち去れば良いだろう。

そう考えとりあえずコンビニの外に出るべく髭の男を促して外へと足を向けたところ。

「！お前は……」

「ん？ああ、天然か」

そこには先日見た天然のペルソナ使いが居た。

多分こいつも月光館学園の人間なのだろうが、あれ以来こいつを見たのは今日が初めてだ。

丁度いいや、こいつの保護を頼むか。ひょっとしたらこいつにも適性があるかもしれないし。

「丁度いいや、影時間に迷ってる奴が後ろにいるから保護してやってくんろ」

「ん？ああ、それは別にかまわないが……」

お前は どうする？ といった視線を向けている。

特にする事は無いが散歩を続けたいので素直に答える事にした。

「散歩続けたいから俺は帰る。」

そいつの事は影時間明けるまで適当に相手してやったらいいんじゃない？

今日はシャドウも大人しいし、戦う事はなさそ……「ごめん嘘だわ 余裕で嘘だわ」

天然ペルソナ使いの背後から数体のシャドウがこちらに向かって

いた。数は目測で10体程。

シャドウ達はこちらに気付いた様子ではないがひよっとしたらまだ居るかもしれない。

……と言ってもケツアルコアトルを出すほどではない。装備も拳銃しかないが十二分だ。

「な、なあ！何だよあれ！あの变なの！！俺死ぬの？死んじゃうの！？」

「ええい騒ぐな奴らがこちらに気づく！」

軽くストレッチをしているところで迷子の男もシャドウの存在を認知したらしく酷く狼狽し、ペルソナ使いの方はそれをなだめようとしている。

まあ程度なら俺1人で十分だ。そのまま2人にはこの場で大人しくしてもらおう。

「あんたはそいつのお守頼むわ。こっからは俺の戦場だ、手出しは無用」

「……良いだろう、お前の力を見せてもらうぞ」

渋々、と言った様子だが脇腹を軽くさすりながら身を引いた。

どうやらペルソナ使いは負傷中らしい。

それに俺の戦い方を知りたいと言つのもあるだろう。俺が敵なのか味方なのか分かっていない現状を鑑みると。

とはいえペルソナを使う気もないし基本的には大剣の方で戦うし、拳銃だけで戦う分には見世物になっても気にはしない。

兎に角さつさと片付けてしまおう。そう考えた俺はくるくと拳銃を弄びながらシャドウ達の下へ歩みを進める。

「さつきは戦う気ないなんて思ってたが……据え膳食わぬはって言うしな、ちよっと狩って来るぜ」と

先手必勝だ。

シャドウ達がこちらに来るまでに距離がある。

俺は一気に距離を縮めながらも数体仕留める心算で引き鉄を引いた。

最初に着弾したシャドウからは大穴が開かれそこから体液が吹き出る。

……流石対シャドウ用特殊兵装と言ったところか。

大口径の銃口から放たれる銃弾はその一発一発が必殺の牙と成り得るのだ。

「ヘドロの癖に道路で蠢いてんじゃねえよ!!」

ったく道路が汚れちまうだろうが、下水道を通りやがれっての!」

跳躍し重力を味方につけつつシャドウ達の中心へ落ちる。

俺のかかと落としに巻き込まれたシャドウがペンキをぶちまけたかのように辺りに飛び散った。

相変わらず汚い液体だ。

いや、影時間が明ければその汚れは消えるのだがマジで精神的に不愉快。

「お前ら程度の雑魚にこれ以上弾薬を消費するのはもったいないねんだよオ!!」

普段は剣を使っている為に直接殴ると言う事が少ない、と言う事で今日はこの四肢を武器に戦おうか。

シャドウの体液が精神的に汚いとか言いながら近接で戦うのはどうなんだろう。でもまあ、たまにはね。たまには。

シャドウ達の中心に降り立った為、自然と四方を囲まれる状態になった。

じわじわとその包囲をシャドウは縮めていく。俺はそれを破るべく真正面のシャドウに向かって蹴りを放つ。

すると両サイドと背後からも動きを察知出来たので数歩後ろに下がると同時に跳躍し、空中で一回転。

どうやらアギを放つたらしい。視線の先には地面ではなく炎の塊が通過するのが見えた。

そうしてシャドウの真上に着地しながらも思い切りそのシャドウを踏みつぶす。

ペンキをぶちまけ2号の完成である。

「あっはっはっはア!!」

続いて近くにいたシャドウを鷲掴みにしてそれを振り回す。

殴ってよし、投げて良しの簡易鈍器である。

周辺のシャドウを倒す事も出来、同時に武器と言う消耗品をそのまま消耗させていいと言うまさに一石二鳥の即席武器だ。

そうしてひとしきり暴れまわったところでようやくシャドウの数

が残り一体になった。どうやらシャドウは目測の10体のみでそれ以上は居なかったらしい。

さっきは弾薬がもったいないと言ったものの、何かもうめんどくさいし体内時計ではそろそろ影時間も明けると告げている為早々に終わらせることにする。

「これでラストォー!!」

両手に拳銃を握り1発ずつ銃弾を放つと、それらは最後のシャドウへと吸い込まれるように着弾。

二つの穴をあけたシャドウはあっけなく消滅し辺りからは静寂が取り戻された。

「うし。一丁上がりっ」と

うん、良い汗かいた。このまま走って帰ろう。
そして帰ったらシャワー浴びて寝るんだ。

とここで、この後の予定を瞬時に組み立てるとコンビ二に放置した2人の事を思い出した。

「お前ら！多分もう影時間も終わるからこのままアディオス！」

「あ！おいコラ待……！」

背後ではペルソナ使いが何か喚いているが気にせず走り去る事にする。

シャドウとやり合って火照った体のクールダウンには丁度いいだろう。

しばらく街中を走り抜けると、影時間も終わりを告げた。

・・・

コンビ二に取り残された2人はあつという間に見えなくなった里峰竜児を見送る形で立ち尽くしていた。

彼に天然のペルソナ使いと称された男……真田明彦はペルソナもろくに使わない状態であれ程の運動能力を発揮していた事に対する驚きのあまり里峰を追う事すらままならなかった。そもそも追いかけても追いつかなかっただろう。

一方で彼に髭と呼ばれた男……伊織順平は自身の身に降りかかった不幸と、それをヒーローのように助けてくれた男に対しての興味が尽きずに動く事すら忘れており、当初は泣きべそをかいていた伊織であったが里峰の戦いっぷりに初めて戦隊物の特撮を見た時の興奮を思い出していた。

「すっげー！！何だよあれマジカッケーよ！っ！か何？ただのジャンプでどんだけ飛んでんだよ！人間技とは思えねー！！」

今まで貯め込んだ思いを吐き出すかのように叫び声をあげる伊織に対して、真田は鬱陶しそうにしながらも影時間の中でこれだけ余裕を持っていられると言うのはひょっとして適性があるからではないかと考えていた。

多分この男なら自身の誘いに容易に乗る事だろう。命のやり取りに巻き込む事を少し申し訳なく思う真田であったが、なりふり構ってられないと言うのも事実だ。

「なあ、あいつのように……とまでは行かんが、あの異形と戦う術

が欲しいと思わんか？」

「へ？つてかアンタ真田先輩っすか！？ボクシング部無敗の帝王っすか！？欲しいっす！力超欲しいっす！」

「そうか……ならついてこい、調べたい事がある。後俺の事は知っているようだが、一応自己紹介しておくが俺は真田明彦だ。お前は？」

「ういっす！伊織順平っす！！」

伊織の言葉を聞きながら、真田が携帯電話を開くと同時に影時間が終わりを告げる。すると辺りで棺桶と化していた人間達も普通に行動を再開し始めた。

その光景に伊織はもの珍しそうにキョロキョロと視線を泳がせる。どうやら先程までの事を思い出せていない様子だ。

「あ、あれ……俺は……？確か真田先輩とどっか行っちゃって……んん？何かすっげー強い人が……あー何なんだこのもやもや感！もやもやスプリング！？」

「……あんな非現実的なモノ、夢としか思えんだろうな。」

事実初めてあの場……後で説明するが影時間と言う所に入った者は大なり小なりその時の事を忘れるもんだ。

とりあえず、俺についてこい。詳しい説明は美鶴がする」

「んー……良くわかんねえっすけどわかりましたー！」

真田の言葉によつやく落ち着きを取り戻した伊織は、素直に真田が歩きについてくる。

ようやく落ち着いたか、と真田は嘆息をつきながらも先程までの出来事を報告すべく携帯電話から桐条美鶴へと連絡を飛ばすのだった。

仲間が増えるよ！やったねry（後書き）

象徴化……棺桶になる事。

勝手に人のイメージを決めつけるでない（前書き）

何か未だかつて無い勢いでお気に入り登録とか伸びてる
感謝感激雨あられです

勝手に人のイメージを決めつけるでない

「里峰ー、お前なんか部活しねーの？」

とある日の昼休み。

購買に群がる生徒をかき分け見事昼飯を入手することが成功したので、俺は自身の席でもそそとカツサンドを頬張っていた所、俺の席の前の奴……ただのクラスメイト・佐藤が話しかけてきた。

部活ね……うん、部活かー。

生前というとあれだが前世ではスポーツは結構好きだったよ。特に球技。

ただし部活なんかしてなかったし、どっちかって言うと自分でするよりも観戦する方が好きだったのだが。

前世と比べて確実に運動能力はアップ……と言うか限界突破しているから陸上部とか入れば重宝されるかもなーなんて。

なににせよ俺は図書委員の火曜木曜で限界です。正直これ以上放課後に予定を入れる気は無い。部活なんてもつての他だ。

特に運動部なんか俺の力はチートになってしまふ。他の真面目に鍛えてる人達に申し訳ないわ。

そんな訳でどストレートに否定しよう。

「残念！図書委員で精いっぱいだわ、俺のキャパシティは」

「マジかよ俺とテニス部入ろうぜー」

「はあ？一人で入れよ」

なんでテニス部なんだよ。お前自己紹介の時部活とかしてなかったつつてたろ。

どんな心変わりがあつてテニス部なんだよ。

俺の突っ込みに対して佐藤は少しもじししながら答えた。つーかもじもじすんな。

「いやさ顔見知りの奴が一人も居なくてさー。俺初心者だからちと怖くて。」

他の奴も誘ったんだけどもう部活決まったりとかしてんだよな」

「ふうん、興味無いけど。つーかなんでテニス部なんだ？興味無いけど。中学の時もテニスしてたのか？興味無いけど」

「へへ、よくぞ聞いてくれました！実はさ……居たんだよ、テニス部にさ……」

はつきり言つて興味無い。

しかしこういうコミュニケーションと言つのは取っておいて損は無いだろう。昼休みの暇つぶしにもちょうどいいし。

そんな打算しかない思考の下で会話の風呂敷を広げてみたところ、佐藤は恥じらいながらも待ってましたと言わんばかりの表情になる。

何だか知らんが恥じらうな気持ち悪い！しかも俺が興味無いのアピールしてるの完全に無視してやがる。

……とりあえず気を取り直して話を進める為に相槌を打つてみる。

「へえ、何が居たんだよ？」

「……俺の、運命の女神がさ」

フリーズ
思考停止なう。

……ああ、成程。一目ぼれって奴か。

でも一人でテニス部に入るのはちよつと気が引けると。

状況は理解した。

だがしかし駄目だな、そんなんじゃ駄目駄目だ。

俺はカツサンドを机に置くと佐藤の言葉に鼻で笑う。

「ハッハッハ」

「何が可笑的い！！」

「これが笑わずにいられるか！本気で好きだったら自分の知らない領分に一人で踏み込む……一人でテニス部に入る位出来ねえでどうして女が振り向いてくれるだろうか！いや、振り向いてくれまい！」

「！！！」

正直テニス部になど入部する気は無い。

故に先手を取る事にする俺。会話のペースを握ってしまえばあとはこっちの物だ。

現に何やら俺の言葉に共感したかのようにしきりに頷いている。

ちなみに俺の言っている事は正直適当だ。

実経験など一切含まれていない出任せに過ぎない。

「素人の状態で経験者について行くつてのは大変かもしれない……だがそれに必死で喰らいついてこそ、そんな佐藤の姿にキユンと来る事もあるだろう!!」

「おお!」

「必死に努力した結果、大会なり練習試合なりで上級者に勝てなくてもあと一步のところまで戦い抜いてみる!あわよくば勝利してみろ!!」

そしたらもうその女の子は一発で落ちるね!」

「おおお!!」

「つまり、俺なんか巻き込んでねえで一人で勝負して来い!!」

「おおおっしゃあああ!!!!やってやる!やってやるぜ里峰エエエ!!!!」

「その意気だ、がんばれ(棒)」

もう良いだろう、もう良いでしょう?(懇願)

なんだよこのノリ、何なんだよ、どうしてこうなったんだよ!!俺もちよつと興が乗ったから演技臭くなってしまったけど……!どんだけ乗せられ上手なんだよこいつ。

「それで、お前のお眼鏡に叶った運命の人って誰だ?」

「岩崎先輩だ!」

「ふーん」

興味無いけど。

「こうしちゃいられねえ、俺は昼休みを生贄に入部届けを出すぜ！」

「おう、頑張れよー」

俺は気の無い返事で佐藤を見送ると、机に置きっぱなしだった力ツサンドを再び手に取る。

すると教室から出ていく佐藤と入れ替わりに岳羽ゆかりが現れた。

「里峰君、居るー？」

「要らなーい」

「あ、居るじゃん」

「いえ、要りません」

「何言ってるのよ、もう。ちょっと話あるから付き合っしてほしいんだけど」

その言葉に周囲のクラスメイトはピシリと固まった。

先程の俺の佐藤に対する熱い言葉を聞いたクラスメイト達は「成程な、モテる男の余裕って奴か。ふざけやがって」とか「死ね」とか言いたい放題である。

ふざけんなよ、俺は何一つモテてなどいない。

perlソナが無ければ岳羽ゆかりは俺に見向きもしないし桐条美鶴

もこの教室に来る事は無かった。

つまり、俺に魅力なんて欠片も存在しちゃいねえんだ。だからそんな辛辣な視線を送らないでくれ。

俺のハートオブガラスにひびが入るから。

突き刺さる憎々しげな視線を背に受けながら、俺は岳羽ゆかりについて行くことにした。

……そして屋上。

昼休みももうすぐ終わりそうなので早々に話を進めよう。

俺はカツサンドを咀嚼しながらも器用に言葉を発する。

「なんのようですかもぐもぐもぐもぐ」

「食べながらしゃべるんじゃないの。」

それはそうと……有里君が昨日目を覚ましたんだ」

有里君……あの時ペルソナを召喚していた少年……じゃなくて先輩。

どうやら意識不明の状態から回復したらしい。はん、そりゃ重畳だ。

別に顔を知っているだけの相手なので興味無いけど、そんなことを言う為に態々教室まで来たのか？

俺がクラスメイトから睨まれるのと引き換えに顔しか知らない先輩の快復祝いですか？

「それもあるけど……桐条先輩から伝言もあるんだ」

「ほう」

と思ったら違っらしい。

「つか俺は気にしてないって言ってるんだけど。

あっちはそうではないらしく、未だに引きずっているようだ。

何せ今日にいたるまで桐条美鶴からの接触が無かったんだからな。更にこうして接触するにあたって人を使うあたり本気で顔を合わせづらいのだろう。

それでも接触したいと考える理由は、やはり力が必要だと言う事か。

「頼みがあるから放課後に時間を取れないか、だって」

「ふうん」

俺が納得したように頷くと、岳羽は心配したようにこちらをうかがってくる。

「ねえ……嫌だったら嫌って言っていいからね？」

「……まあ、報酬次第だな」

「へ？」

「どういう事情があろうとも、無条件で命はるなんざ俺には出来ねえ」

……どの口が言っんだと自分で思う。

だが相手は桐条グループの御令嬢だ。

そんな相手の依頼を受けて、報酬が皆の笑顔なんてチープなモンだったら笑い話にもなりやしねえ。

桐条から報酬として金をもらえるのならそれをそのままストレガに依頼する為の報酬に使えろし。

俺から接触する気は無かったが、こうして桐条側から接触があったと言う事は力を貸してほしいとかそういうあれだと思う。

「報酬があるなら、それに見合った仕事をしねえとな」

「……良いの？」

「良いよ」

ちよっとお使い行ってくるみたいなノリで了承した所、岳羽ゆかりはずっこけた。

俺、そういうオーバーなりアクション嫌いじゃないぜ。

「ってなんかちよっと軽すぎない!？」

……まあ、人の為なんていうよりお金の為って言ってくれた方が分かりやすいとは思っけど……」

「そう言う事だから、放課後は図書委員の仕事あるしそれが終わってからなら空いてるぞ」

すると、俺の言葉に心底意外そうな顔をする岳羽。

図書委員か! 図書委員が悪いんか! いいや真の悪は吉岡だ!!

「里峰君ってそう言うのサボる人だと思ってた……ていうかそもそもそう言う所に所属してるって思ってたなかった」

「俺もその予定で今まで生きてきたんだが、一度の失敗で全てを破綻させてしまったよ」

「……良くわかんないんだけど」

「寝坊したらその間に押し付けられてた」

「なーんだ自業自得じゃない」

「違う吉岡が俺をハメやがったんだ！！俺は断じて図書委員になつたなんて認めねえからな！！」

「とか言ってちゃんと放課後に図書委員の仕事をしようとするあたり、あなたって結構真面目？」

「ふふ、良く言われる。真面目さ競わせたなら全国でも有数の真面目君になれるよって」

「ぶつ、何それどんな大会なの……ってもう昼休み終わるし続きはまた今度ね」

ホントだ昼休み終わっちまう。この後体育あるから着替えにやらんのに。

ちよつと急ぎ足で教室に戻ろうかなと思った所で一つ疑問が。

今この疑問は解消せねばなるまいと先に屋上から立ち去ろうとしていた岳羽に声をかける。

「なあ、岳羽先輩？」

「ん、なに？」

「図書委員の仕事終わったら俺はどこに行けばいいんだ？こないだの寮で良いのか？」

「あ、そう言えば言ってなかったね。いきなり来てもあれだし……
そーだ、私の携帯の番号教えとくから仕事終わったらそこに連絡頂戴」

ゴソゴソとポケットから携帯電話を取り出した岳羽は俺に電話番号を教えるように促してきた。

ああ携帯ね、携帯。携帯……電、話……？

あ。

「やっべ俺携帯電話持つてねーんだった」

「!？」

今まではシャドウとの戦いに明け暮れてたし、携帯なんぞ使う機会が無かったんだよな。

最低限伝えたい事がある人間は周囲に居たから直接伝えればいいって感じでさ。

しまったなこれからこんな感じで携帯の番号とか聞かれた時にありましえんなんて言ったらびっくりされるんじゃないだろうか。と言うか不便だ。

よりよい高校生活を過ごすためにも携帯電話を買おう。
そう心に誓った俺だったのだが。

「……ひょっとして、里峰君って機械音痴？」

「えっ」

変な勘違いをされてしまった。

・・・

「はふう……」

「どうしたの、里峰君？変な溜息ついて」

図書室。

今日は本の貸し出しや返却をする生徒が少なかった為に暇だ。
故に、今俺に対して声をかけてきた長谷川さんがお勧めしてくれた本を読もうかなと思ったのだが家に忘れてきてしまった。

そんな訳で本格的にやる事が無くなったので図書委員の仕事が終わった後にすべき事を脳内でまとめていたのだが。

↓脳内今日すべき事リスト↓

- ・携帯買う。
- ・岳羽ゆかりから教えてもらった番号に電話する。

とまあ、たったこれだけの事なのだが。

携帯電話など使うのは実に10年ぶりである。

研究所から離れた当初は足がつかないようにと言った意図で携帯電話を所持しなかったのだが、最近ではただ単に必要なに駆られる事が無かったからと言う理由だけで携帯電話を買わないまま今を迎えていたのだ。

携帯のカタログでもあれば良いのだがそんなものここには無い。個人的にはあらかじめこれって言う機種を決めてから携帯を買に行きたかったのだが。

……まあ、適当に機能性を重視したものを選んでもらおうかな。

思考をいったん打ち切り、長谷川さんの質問に答える事にする。

「いやさ、高校生にもなつて携帯電話持つてない俺って何なんだって思ってたさ。

昼休みに電話番号の話になって携帯持つてないつつたら驚かれた」

「へえー、意外ね。あなたってむしろ携帯何台も持つてるかと思ってたわ」

「ちょっと長谷川さんの中では俺に対してどんなイメージなのさ？」

「……プレイボーイ？」

「むしろこんなシャイボーイ捕まえてなんつー事を」

心外だ。激しく心外。

生まれてこの方どこか生まれる前からモテた事なんか無かったっの。

そりゃ転生する前はそう言う付き合いもあつたと言えはあつたけど、プレイボーイなんて言われる程遊んじやいなかったぞ！

なんて反論しようか考えていたところ、別の図書委員の人が声をかけてきた。

「あ、あのー長谷川さん、ちょっと良いですか？」

「はい、どうしました？」

「実は私達この後急ぎの用事があるので、この後の作業をお願いしたいんですけど、良いですか？」

「そうですね、それなら後はやっておきますので大丈夫ですよ」

「すみません、それじゃお先です……里峰君もごめんね」

「気にするな問題無い」

ペコペコと申し訳なさそうにしながら他の委員たちは帰って行った。

まあ別に今日は仕事もないから明日の引き継ぎ位しか残ってないし……。

とここで今までも気になっていた事があつたのでこの場を借りて思い切って聞いてみる事にした。

「なあ長谷川さん」

「なあに？」

「ぶつちやけ聞くけどさ、なんで3年生まで長谷川さんに敬語なの？ひょっとして月光館学園の女帝なの？」

3年生が敬語を使った所で俺が敬語を使う理由にはならないし、誰に対しても敬語を使う気など毛頭ないのだが。

俺の事はさておき、他の面々の長谷川さんに対する敬語はなんつか、敬う為の語句とは思えない。

「あ、それ聞いちゃうんだね……」

もしかして地雷踏んじやった感じですか？

「嫌なら別に言わなくて良いけど、何となく聞いてみただけだし」

「うっん、里峰君なら良いかな……私ね、あなたより3つ年上の留学……と言うか休学してたのよ。この学校の生徒のなかで、誰よりもお姉さんになっちゃった」

「俺としては年上の方が良いなあ」

「……だから、クラスメイトにも上級生にも丁寧語を使われ……つて里峰君はそんな事で態度を変える人じゃ無かったよね」

「その通りだ。俺を誰だと思ってやがる！」

なんで俺はこんなに偉そうなんだ。

そんな俺なのに長谷川さんは柔らかな笑みを浮かべている。なんかスミマセン。

「ふふ、ありがとね。他の人にもそういう風に接してもらいたいん

だけど、もう諦めちゃった。

……そうだ、この後携帯電話買いに行くなら私も着いて行っていないかな？私もそろそろ機種変しようかなって思ってた」

「ん、構わんよ。それじゃさっさと仕事終わらせようか」

「そうねー」

長谷川さんは1歳年上ではなく3歳年上らしい。

あれだな。ノープロブレム無問題だな。むしろばっちこいつて言うか…

…って何の話だ。

明日担当の委員たちの為の引き継ぎ作業を終えた所で携帯ショップへ向かうべく学校を後にした。

...

「そんな多機能そんな携帯買って大丈夫なの？」

「使う機会が無かっただけで別段機械に弱い訳じゃない」

「じゃあ赤外線とか使えるの？」

「余裕だっつーの」

夜。

携帯電話を入手した俺はあらかじめ岳羽に聞かされていた電話番号に電話をした。

そうして岳羽と合流した後に桐条の待つ寮へと向かう事になったのだが、まずは岳羽の俺に対するイメージを払拭する事から始めよう。

俺は自身の携帯からアドレスと電話番号を送信すべく赤外線通信の欄を選んだ。

岳羽の携帯と通信を交わすと送信成功の文字。ドヤアと言わんばかりの笑みを浮かべていたら、岳羽は何やらにつこりと微笑んでいる。何だその母親のような慈しむような眼は。

「良く出来たね、携帯ショップの人に聞いてきたの？」

「……」

成程ね、一度定着したイメージは中々覆せないと。

いや別に態々否定する必要は無いとは思っただけどさ、妙なイメージ持たれるのもなんか癪だし。

……まあ、別に良いか。勝手に勘違いされる分には損は無いし。

とか何とか、他愛もない話をしながら歩いているとようやく目的の場所に辿り着いた。

「ここね、あなたも1度来たと思うけど」

「うむ」

さて、如何に交渉を有利に進めるか。

先日桐条と話した時は何の証拠も持っていなかったからな。

あの時の桐条を見る限りでは証拠を提示するまでもなく実際に行われた事だと察していたようだ。

10年前、研究所が火に沈んだ日。

俺はあの時ストレガの連中に対シヤドウ用特殊兵装の設計図と俺らに施した実験の内容を記したデータを持って行かせた。まさに火事場泥棒。

今回必要なのはその後者。実験内容に関するデータを開示する事で、少なくとも桐条の闇と密接していたと言う事の証明としよう。

まあそれは万が一桐条が俺の言う事を信じていなかった場合の策だ。

「それじゃ着いてきてね」

岳羽は俺を先導して寮の扉を開いた。

そこには桐条とこないだ髭男の保護を頼んだ男ともう一人……見知らぬおっさんが居た。

「やあやあよく来たね。僕は幾月修司。月光館学園の理事長を務めさせてもらってるよ。」

それじゃあそのソファーにでも腰を落ち着けてくれ」

見知らぬおっさんは俺の姿を確認するとともに陽気な挨拶で俺を迎え入れた。

幾月修司……幾月修司ね、うん。

兎にも角にも名乗られたのなら俺も名乗り返さねばなるまい。

俺は幾月に言われるがままにソファーに座ると共に簡単な自己紹介をする事にした。

「わざわざご丁寧にどうも。俺は里峰竜児だ」

「うんうん、里峰君だね。あ、紹介が遅れたね。君も知ってると思

うがこちらが桐条美鶴君。そしてこちらは真田明彦君だ」

「お前とは何度か顔を合わせる事があったが自己紹介は出来ていなかったな。真田明彦だ、よろしく頼む」

「どーも、お加減はいかがですか？」

「ああ、俺としては十分戦えるんだが「明彦」……このように、美鶴がうるさくてな」

「あつはつは、力があるのにそれを振るう機会が与えられないってのは辛いつすよね。俺も入院してた時期があるから分かるわ」

さてさて、これで互いに自己紹介も終わったわけで話を始めたいわけだが。

「岳羽先輩も話聞いてくの？俺としてはどっちでもいいんだけど」

「え？駄目なの？」

下手したら桐条の裏を見せる事になるからなあ……。

ただでさえ桐条グループのご令嬢が率いてると言うのに、それを見せたら不信任を抱かれる事請け合いだろ。

俺としちやギスギスした職場で働きたくないからそう言うのは余所でやってほしい訳で。

どうするのか、と言った視線を桐条に送った所、意を決したように桐条は口を開いた。

「お前もそこに座れ、岳羽」

「あ、はい」

良いのか？身内の汚いところを見せる事になるけど。

……聞くまでもないか。むしろそんな事を聞くのは桐条に失礼と言うものか。

ならこつちも遠慮は要らないだろう。

「で、だ。こうして会話の場を設けたと言う事は、俺の力を借りたと言う事か？」

俺の正面に向き合った桐条は迷うことなく頷く事で肯定した。

「そうだ。私は君が欲しい」

「「ぶつー！」」

手元に置かれたお茶を一口含んだ瞬間の不意打ち。

先手を取ってきたか、やるじゃないか桐条美鶴。流石次代桐条当主となる予定の女。

俺どころか味方すら巻き込む一撃、感服した。

「な、なあ美鶴？その言い方だと語弊を招くと思うんだが……」

「む、そうか？」

思わぬところで先手を取られてしまった。

しかも狙ってやっていない辺り末恐ろしいものがある。

兎に角、息を整えよう。

俺は一旦心を落ち着けると、再び桐条と向き合った。

「話を進めようか……まあ別に力を貸すのはやぶさかじゃあない。だが、俺はお前らの仲間になんぞなる気はない」

「……どういうことだ？」

力を貸すのに仲間じゃない。桐条は俺の言った事をよくわかっていないようだ。

「そうだな、時給換算と仕留めたシャドウの数による出来高。どっちが良い？」

「……フリーランス傭兵として雇ってくれ、と言う事が」

「そのとおり。俺としては出来高だとありがてえが」

「良いだろう。君も金銭は何かと入り用だろうからな」

「サンキュー、助かるぜマジで」

良いね、その決断力……当主には必須技能だろうよ。

俺は内心これで貯金とか出来るとか所帯じみた事を考えながら桐条に感謝を示した。

・・・

（……私って、別に居ても居なくてもよかったよね？なんで里峰君達はある態度とったんだろ）

里峰達が契約の条件を詰めている中で、岳羽は一人悶々としていた。

勝手に人のイメージを決めつけるでない（後書き）

P4の林間学校の回めちゃくちゃ笑った
次回はくぎゅ回と言う事で楽しみだ

狩る者と狩られる者（前書き）

何か勢いで書いてるからどうかで矛盾みたいなのが起きてる気がする

狩る者と狩られる者

—— 幸せになれよ、クソガキ。

火の海に沈んだ研究所。

そこから少し離れた橋の上。

女は死神に誘われ、その命を散らした。

ただ無為に無意味に研究者達に身を委ねる日々の中、俺は一体彼女に何をしてやれたのだろうか。

幸せになる。幸せとは何だ？分からない。

分からないが俺の幸せはもう随分と歪んでしまっていたのだろうか。

その時だ。

俺が一つの・・・を交わしたのは。

・・・

「……夢、か」

また随分昔の事を夢見たものだ、と俺は自嘲した。すっかり忘れたつもりだったのに……いや、ただ単に思い出すまいと逃げてただけなんだろうな。

頬には涙の跡が残っており、思わず舌打ちをしてしまった。昔の事を思い出して泣くとは、我ながら随分女々しいな、オイ。

いや、女々しいという表現は男女差別だな。最近の女性は強気なのが多いし。

俺は喉が渴いたので冷蔵庫から水を取り出す。喉を通りぬける清涼感が気持ちいい。

さて。

のんきに昼寝をしていたら夜になっていたわけだが、本日は4月19日、日曜日である。

休日は休むべきだと考え日中は特にする事もなく部屋でだらけていたのだが、夜になっても相変わらず影時間が到来するまで自身の部屋でだらけるつもりだ。うん、たまにはそう言っ日があっても良いと思う。

それはさておき、桐条美鶴ら天然ペルソナ使いの集まりの事を特別課外活動部と呼んでいるらしい。その特別課外活動部に力添えをする事になった俺は（飽くまで傭兵と言う立場なので入寮する事は無いけど）、あいつらがタルタロスに行く日はそれに加わる事になった。

つつても俺はほぼ毎日タルタロス行ってるからそこにあいつらが居るか居ないかという要素が加わっただけである。

たったそれだけの事で賃金が発生するのだから実にうまい。

ところで話は変わるが、ゴールデンウィーク前日の日に『狩人』と戦うことにした。

この『狩人』と言うのは人型にかなり近いシャドウで二丁の拳銃を手に持ちタルタロス内を徘徊している。以前……確か6年前に1度だけ対峙した事があるのだが全く歯が立たず、タカヤ達の助けが無ければそこでデッドエンドになっていたと思うほどの強敵だ。

その後何度か『狩人』を見かける事はあったのだが勝てる気がしないとその都度逃げ帰っていた。

6年経った今でも勝てる気がしないと言うのは如何なものかと自問するものの、それ程に強力で強烈で凶悪だったのだ。

転生して以来、二度目の本気で死ぬかと思った出来事である。

それはさておき、なぜゴールデンウィーク前日なのかと言うと、怪我をする可能性を考慮した上での日程である。

ようは休養に充てたいと言う事だ。その辺に關してはお茶を濁した感じで桐条にも伝えてあるので戦列から離れる事に了承をもらっている。

奴は俺と同じく拳銃を使いながらも圧倒的な威力をもつスキルを連発してくる。

だが、戦いの場はタルタロスと言う名の迷宮……とはいえ室内と言う場所であり、それを上手く利用する事が出来れば奴に食らいく事も出来るのではと考えている。

それで死ぬようなら、俺はそれまでの人間だったってことだ。

(……死神、か)

思わず手に力が入る。

あの時…… 10年前、俺は何もできなかった。

この身体はシャドウを殲滅する為の物なのに、あの死神に対して傷一つつけてやる事が出来なかった。

結局何もかも失って、八つ当たりのようにシャドウを狩って……。

あの頃から何一つ変わっちゃいないと言う錯覚を覚えそうになる。10年と言う時を経ても何も変わらないなんて、俺の10年は一体何だったんだと思う事がある。

だからこそ、『狩人』と戦うのだ。

少なくとも、強くなったと言う事を証明する為に。
誰に見せるわけでもなく、ただ自分の為だけに。

とここで、俺の中で引つ掛かる何かを感じた。

(……傷一つつけられなかった。確かにそうだ、あの死神は俺の意識が飛ぶまでびんぴんしてた)

なら、俺はどうやって戦っていた？銃撃？剣撃？それともペルソナ？

(そりゃ、ペルソナでも拳銃でも……？)

何か引つかかる。確かに戦ったはずだ。それだけは確実だ。

力のこもった弾丸を装着し、殺意の撃鉄を起こし、ただ感じるままにシャドウを殲滅すべく引き鉄を引いた……はずだ。

だと言うのにその光景が出てこない。記憶障害か何かだろうか。

確かに戦ったという自覚はあるのに、その映像が脳裏に再生されないのだ。

(……まあ、どうでもいいか)

思い出せない事を考えていても仕方ない。

俺は影時間が到来した事を確認すると、タルタロスへ向かうべく移動を始めるのだった。

・・・

「……ケツアルコアトル、マハガルダイン」

持ち得る中でも最大級の攻撃範囲と威力を誇るスキルでシャドウを一掃する。

普段ならこの身を以ってじっくりと戦うはずだったが、どうにもそんな気分じゃない。

いつもほどの昂りも無いし、さっさと終わらせてもう一度寝よう、と言う気分にはならないのだ。

だったらタルタロスなんぞ行くの止めてもう一度寝ればよかったのに、とも思うのだが。

……タルタロス行かないとそれはそれで落ち着かないんだ。最早病気だろう、これ。職業病とか表現するのが一番近いかな、お仕事じゃないけど。

(……いや、中毒だな)

と、脳内で突っ込みを入れつついつものように16階の柵がある所まで登っていく。

何の事はない、いつもの戦闘と同じだ。殴る、蹴る、投げる、斬る、撃つなんでもござれだ。

そうしていつものようにシャドウの巣を荒らして回る。

うむ、いつも通りだ。

だと言っのに何だろうか、この胸騒ぎは。

目の前には15階へ進む階段がある。

確信に近い予感。ここで引き返せと警鐘を鳴らしている。

しかし、この足は止まらない。止められない。

俺は死刑台を上るような気分で階段の上に達した。

「――！」

成程、嫌な予感とはこの事が。

15階。

そこには1匹のシャドウも居なかった。

どこかに隠れているとかではなく、気配すら感じない。

そしてその状況下において、高確率で奴が現れると今までの経験上分かっている。

とはいえそれにもタイムラグが生じる為、奴が現れる前にさっさと階段を登り切れば良いのだが。

「来いよ、狩人」

ジャラリ、と鎖の音が鳴り響いた。

それは『狩人』が身にまとっている鎖の音。

その音は徐々に大きくなり、俺の所に近付いていると言う事がすぐに分かる。

急に変な夢見たと思ったら、これの予見でもしていたのだろうか。まあ、そんな事はどうでもいい。

（初手はもらっておきたい……！）

まずは先手必勝。

音の聞こえた方向からして俺の正面に見える曲がり角から出てくるだろう。

挨拶代わりに持ち得る弾丸を眉間にぶち込んでやる。

しかし、俺の目論見は成功しなかった。

「ッ……!!」

真上から感じた「死」。

俺はそれをただ真正面に転がる事で回避した。

それは今まで培ってきた経験ではない。

それは今まで鍛え上げてきた力ではない。

ただ単に偶然である。

自身の影に違和感を感じ、来るかもわからない攻撃を回避したのだ。

しかしそれは正解で、俺が居た地点には狩人が佇んでいた。

まるで回避するのが当然だと言わんばかりに、狩人は二丁拳銃をこちらに向ける。

俺は呼吸する事も忘れて足を動かした。

跳躍し、地を転がり、壁を蹴り、ただ我武者羅に狩人の照準を定めさせないようにする。

俺が持ち得る運動能力の全てを発揮し、空間内を掌握した。

狩人は相も変わらずその場にとどまっており、何と云うか正直何

をしてくるかわからない。

(……だったら、何も出来ねえようにするしかねえだろうが!!)

両腕だけを狙って弾丸を放つ。

一撃で倒す事が不可能なのだから、こうして攻撃手段を奪っていくしかない。

それ故の局部破壊。

壁を走りながら狙撃。終わればすぐに回避行動。

その壁を蹴り地面に片手を付き側転のような動きで反対側の壁へと向かいながらも、もう片方の手では狩人の腕を狙撃。

何をするにしても狩人の腕を狙う。しかし相手は俺が思う中でも最強に分類される敵。

何発か狩人の腕に……特に関節部を狙ったの狙撃だったのにも関わらず、さして効果が見られなかった。

強いて言うなら銃弾が直撃したら少しだけ仰け反る程度か。

それでも関係ない。雨水だって岩を穿つ事が出来るのだから、狩人の腕が碎けるまで銃弾を叩きこむまでだ。

俺は流れるような動作で銃弾を込める。しかし目だけは狩人を捕えていた。

狩人がこちらに銃を向けたのを視認すると共に引き鉄を引く。

銃弾は狩人の腕に再び当たり、狩人の狙いが逸れる。

「うらアアアアアアア!!」

今がチャンスだ。

俺は反対側の壁へ到達すると同時に壁を蹴り跳躍する。

狩人の真上まで飛び上がった俺は全力で大剣を叩きつけた。

流石にそれで殺れるとは思わなかったが、手傷の一つでも負わせられると思ったのだが。

甲高い金属音が鳴り響く。それはいつも感じるシャドウを斬った感覚ではない。

「チツ……そう簡単にや殺らせてくれねえ……か!!」

狩人はその二丁拳銃を交差させそれを防御としていた。

しかし、それは防御をする必要があると判断したと言う事に他ならない。

「だったら話は簡単だ……攻撃が通るまで斬りやあ良いんだろオが!!」

先程の攻撃は防御され弾かれてしまったが、一筋の光明が見えた。俺は地に着地すると共に再び空間内を可能な限り飛び回る。

動かない狩人。

俺はそれがとても不吉な……何かドギツイ一撃が来るのではないかと言う前兆のように思えた。

そして狩人は、おもむろに拳銃を天へ掲げる。

そこに俺は居ない。奴は一体何を狙っている——？

ふと以前の戦闘を思い出した。

あれは奴が何かしらスキルを使う時の動作で、あの時は確かメギドラだった……！

逃げ場が無い。

(……いや、1つだけある)

どうするかなど、考えるまでも無かった。

俺は最短距離をまっすぐ駆けた。それしか間に合う方法が無かったからだ。

数瞬の時をおいて、空間は爆発で埋め尽くされた。

そして訪れる静寂。

先程の爆発が嘘のように戦場は無音に包まれていた。

俺はなんとかかんとか一命は取り留めている。取り留めてはいるのだが……。

「……」

今現在、狩人にしがみついている。爆発を避ける方法、すなわち狩人の懐に入り込む事だ。

右手で拳銃を狩人の頭に突き付け、もう片方の手で狩人の左手を抑え、ケツアルコアトルで狩人の右手を抑えさせた。

正直、抑えるので精一杯です。

ヤバい腕がプルプルする。引き金を引く握力すら狩人を抑えるのに使われていると言うか、正直両手で押さえないと無理だ。

すると突如として狩人から力が消えた。どういうわけだと訝しがる俺だったが、その原因がすぐに分かった。

(影時間が終わる——!?)

このままでは俺はタルタロスに取り残されてしまう。

俺は狩人から飛び降りると、たまたま見えた窓のような空間から飛び降りた。

ついでに狩人に一発ぶちこもうと拳銃を構えたのだが、そこには既に誰もおらず。

「勝負は預けたって事が……舐めやがって」

俺が背を向けた時点で攻撃することもできたはずだ。

それをしなかったのはいずれ対峙する事が来るのを分かっていたからなのか、はたまたただ単に見逃してもらっただけなのか。

何にせよ分かる事は一つ。

「死ななかった」

我ながら無様な戦いっぷりだと思う。

しかし、生き延びた。生き延びてやった。

それも誰かの助けを使わずに。

それも怪我を負って入院せざるを得ない状況にならずに。

15階から飛び降りた、と言う事で当然宙を舞っている状態。

俺はタルタロスが学校に戻る間、その光景を空中でぼんやりと眺めていた。

・・・

翌朝。

死にそんな目で俺は学校へ向かっている。

流石にあんな事があった後に元気に学校に向かう事など俺には出来ない。無理だ。

しかし学校には頑張っで行っていると言う事だけは評価してほしい。

週の頭の月曜日。

前世の時からそうだが、この月曜日は憎たらしい事に毎週毎週やってくる。

この憂鬱は精神年齢が何歳になろうとも衰える事が無い。

大体、奨学生で成績を保たねばならんとはいえ、1度は高三までの内容を修めているのだ。

いくらこつちに生まれてからのブランクがあるとはいえ、一度教科書を読めば結構思いつけるわけで、はっきり言ってテスト前だけ頑張れば良いんじゃないかなと思っている次第である。

いや、それはどの生徒も同じ事か……まあなんだ、結局いくら御託を並べようと学校に行かざるを得ないと言う状況に俺は居るのだから、諦めるしかない。

諦めるしかないんだが、こうして内心愚痴る分には一向にかまわんだろう？

「月曜日は消えればいいよー火曜日も消えればいいよー

水曜日に木曜日に金曜ー消えーれば最高ー」

「なんつーやる気を削る歌を歌ってんだお前は……」

すると背後から俺の歌に駄目出しをする声が聞こえてきたので後ろを振り向く。

そこには何かテニス部での調子はどうか聞いてほしそうな顔をし

ている佐藤が居た。激しくうざい。

「何だ佐藤か、愛しの岩田先輩を落とせたか？」

「岩崎先輩だ！やー、それがさあ、初心者向けのラケットとかガットとか色々教えてもらうことになってさあ！これってデートだよな！？」

「そーかそーか、頑張れよ」

「おう！じゃ、俺朝練あるから先行くわ！」

どうやら佐藤はテニス部に入部して以来頑張っているようだ。だからなんだと言われればそれまでなのだが、佐藤は日々を楽しんで生きてるらしい。

「何だかなー」

もし影時間が消えたでしょう。
その時俺に何が残っているのか。

幸せって何なんだろうな。
シャドウが居なくなった時、俺が幸せを感じる瞬間が来る事があるのだろうか。

「まあ、その時が来たらその時に考える事にしようか」

生きて帰れた。とりあえずそれだけは喜んでおこつ。
生を諦めた前回と違う。それはすなわち成長の証なのだから。

狩る者と狩られる者（後書き）

次回ぐらいからP3本編にも本格的にからんで行くことになりそうです

仄暗い奈落の底から（前書き）

P3の主人公……主人公故にキャラがつかめないと云つか喋る機会がまるでないぞ……！？

仄暗い奈落の底から

4月19日。本日は日曜日である。

寮の一室で有里湊は自身のベッドに横たわり思考を重ねていた。脳内での議題は「影時間とペルソナ」である。

有里はあの日の夜以降1週間ほど意識不明の状態で入院を余儀なくしていたのだが、土曜日に晴れて退院する事が出来た。

その土曜日の夜に有里は桐条美鶴から影時間やあの時彼が召喚したモノについての説明を受け、そしてその影時間を消す為に協力することとなったのだが、あの時見た異形を相手取るらしく有里は内心面倒くさいと思っている。

しかし、有里は一つ気になる事があった為、桐条らの頼みを渋々ながら引き受ける事にしたのだ。

記憶が曖昧ではあるが、その曖昧な記憶をたどる限りでは確か、大剣を持った男が何やら文句を言いながらそのシャドウとやらを倒したはずだ。

そしてその男の顔を見て何かデジャヴのようなものを感じたのだが、どうにも記憶が定まらない。

何にせよ影時間と関わりを持つのであればいずれ分かる事もあるかも、と考えた故の判断である。

とはいえあの異形を見る限りでは恐らく命を賭ける事になりそうな気がするのだが、どうにも周りの人間達は些か樂觀的な気がする。

(……どうでもいいや)

結局、シャドウとの戦いを知らないのだから後になってみなければ

ば分らない、と考え有里は思考を打ち切った。

すると下の階から誰かを呼ぶ声が聞こえる。

それに耳を傾けると声の主がすぐに判明した。

「あのー、私だけどーちょっといいー？」

岳羽ゆかりだ。何か用があるらしい。

とりあえず岳羽の言われるがままにラウンジへと降りると、岳羽と真田明彦が玄関の前で待っていた。

何の用だろうと首をかしげるものの、どうやら岳羽も真田に呼ばれただけらしくこれから何があるのかは真田しか知らないらしい。

「わざわざ済まないな、ちょっと紹介したい奴がいるんだ」

呼ばれた理由は誰かを紹介したいとの事だ。

その紹介したい奴と言うのはどうやら玄関の先にいるらしい。

……しかし、玄関は開かれる気配が無く、少し待つと真田が玄関の先に向けて声をかけた。

「……おい、まだか？」

「ちつと待つ……重つ……！」

催促の言葉を受け、玄関の先に居ると思われる人物は慌てたように返事を返す。

ガコガコツ、と地面に何かをぶつけたような音を響かせながら玄関が開かれる。

玄関から現れた男を見て、岳羽が驚きを示した。有里はどうでも

よさげに見える。

「順平！？……なんであんたがここに！？紹介ってまさか……」

「恐らくお前達も知ってると思うが、こいつは2・Fの伊織順平だ。今日からここに住む」

「へへ……どーも、伊織っす」

「今日から住むって……嘘！？何かの間違いでしょ！？」

ガラゴロと重そうなスニーカーを転がす音と共に伊織順平は姿を現した。

その荷物を見る限りでは、どう考えてもお泊まり会なんて物ではなく普通に入寮するという事だろう。

驚く岳羽とぼんやりしている有里を置き去りに、真田は話を進める。

「この前の晩、偶然見かけたんだ。

……最も、その時点で既に里峰の奴に救助されていたがな」

「里峰君……どこにでもいるね、何か」

こんなところでも里峰竜児の話題が上がった事で、岳羽は少し苦笑しながらも状況を受け入れたようである。

一方で「里峰」なる人物を知らない伊織は、会話の内容から自身が影時間に初めて迷い込んだ時、ヒーローのように現れてシャドウをちぎっては投げを地で行っていた男の事だと当たりをつけた。

「里峰ってまさかあの時のめちゃくちゃ強かった人の事っすか！？

名前知ってるって事はここに住んでるって事っすか？！

クーツー！どうやってあんな風になれんのか伝授してもらいてー
！」

一人興奮する伊織。

しかし悲しいかな、目的の人物はここにはいない為、すぐさま否定の言葉が伊織を貫く。

「残念だったな伊織。奴はここにはいないぞ」

「な、なんだってー！！？」

「あ、でもこれからはタルタロスに行くのに協力してくれるんですよね？」

「……タルタル？何それ」「……？」

タルタロスという聞きなれない単語を放った岳羽に対して伊織と有里は首をかしげた。

どうやら真田はそれに関しても今説明するつもりだったらしく、岳羽の言葉を肯定しながら口を開いた。

「ああ、そうだ。立場としては傭兵のような形になる。

必ずしもあいつが居るとは限らないが、あいつが居る時は戦い方を学んだ方が良くかもしれんな。

それに俺達も頭数が揃ってきたしな。タルタロスには絶対何かがあるはずだから、俺達はその何かを探しに行くんだ」

「……謎を解く力ギ、ですか……あれば良いですね……」

はつきり言って目的が不明瞭である。

里峰はシャドウと戦う行為そのものに意味を見出している為タルタロスに行くのも頷けるが（ある意味頷けない）、あるかもわからない何かを探しに行く、と言うのは流石にどうしろと言うのだと疑問を呈さざるを得ない。

要領を得ない、と言った表情をする有里や伊織に対して真田は言葉が続けた。

「むしろ無いと困る。あんな怪しい場所に何も無いなんて笑い話にもならんからな。

……それで、詳しい話は明日理事長からする事になっているから、忘れるなよ」

真田の言葉によってその場は解散となり、各々が自身の部屋に戻る中で有里は一人里峰と言う男について思いを馳せていた。

（……どうでもいい）

割とすぐに思考は打ち切られたが。

・・・

翌日の夜。一同は寮のラウンジに集まっていた。

昨日真田明彦が言った通り、理事長……幾月修司から話があるから夜はラウンジに集まれと桐条美鶴に言われた為である。

有里湊がラウンジに来た時点で、他の全員が揃っていた。どうやら有里が最後らしい。

「よし、全員来たようだね」

彼の姿を見た幾月は満足そうに頷くと、話を始めた。

「我々の擁するペルソナ使いは長い間桐条君と真田君の2人だけだった。

……どうやら里峰君とは入れ違いになっていたみたいだね。けど、最近は一気に仲間が増えて今や5人になっている。

そこでだ。今夜0時から、いよいよタルタロスの探索を始めようと思っている」

「あのー、昨日もタルなんとかって聞いたんスけど、なんなんスカソレ？」

「タルタロスよ。てか順平、あれマジ見たことないの？超目立つのに」

「はて……？」

伊織の言葉に岳羽ゆかりが呆れたように返答する。

確かに、月光館学園と言う地が一瞬にして頂上の見えない塔に変貌するのだから目立たないはずが無い。

真田が言うには伊織はつい最近影時間に迷い込んだらしいので、ペルソナ存在を知ってから日が浅いという意味では仕方のない事かもしれない。

それを踏まえた上で、幾月は伊織のフォローに回る。

「見てなくても仕方ないさ。何せあれは影時間の中にだけ現れるも

のだからね」

「影時間の中……だけ？」

それでも伊織はよくわかっていないようだ。

「シャドウと同じって事だ。面白いだろ？」

それに、あそこはシャドウの巣だ。俺達のスキルアップにもうってつけの場所さ」

百聞は一見に如かず、と言う事で後で見たら良いだろうと真田はタルタロスについて要約した。

しかし、シャドウの巣と表現されて影時間初心者な伊織が驚かないはずが無い。

まさか虎穴に入るような真似をいきなりする事になるとは思わなかったからだ。

「お、おー。シャドウの巣っすかー……」

タルタロスを楽しそうに語る真田を見て、伊織は少し引いた。そんな真田を見て岳羽は心配したように尋ねる。

「……先輩、まさかとは思いますがその体で行くんですか？」

「明彦は怪我が治ってないから、同行はしてもらうが探索は無理だ」

「……分かってるさ」

今まで黙っていた桐条美鶴が口を開く。恐らく、ここで釘をさしておかなければ真田は確実に特攻を仕掛けるからだ。

桐条の釘刺しを受けた真田は、非常に悲しそうな表情を浮かべながら桐条の言葉に同意した。

恐らく、何も言われなければしれっと探索に加わっていたに違いない。

「まあ、深入りしなければ真田君抜きでも大丈夫だろう。それに、今日は彼も来てくれるみたいだからね」

「里峰君ですか？」

幾月の言葉に岳羽は少し安心した表情を浮かべながら問う。
何せ少ししか見ていないとはいえ、強さの片鱗を見せつけられたのだからその戦力は計り知れないものがある。

未知なるタルタロスに於いて、これ程頼れるものは無いだろう。

「その通りだ。とはいえ、彼に頼りきりになってはいけないよ。シャドウを相手にしていく以上、タルタロスの探索は避けて通れないからね」

「大丈夫っす！先輩の分は俺がキツチリ、カバーしますって！」

「なんかふあんだな……」

里峰竜児と言う多大な援軍があるとはいえ、結局は自分達も戦わなければならない。

真田と言う戦力が欠けた中で、自分を含めた新人の3人がどれほど戦えるのだろうか。

ここまで一言たりとも口を開いていない有里は、今現在の戦力をぼんやりと計算していた。

話は終わった。後は影時間を待つだけだ。各々が気合いを入れる中、桐条は幾月に尋ねる。

「では理事長はどうなされますか？」

「僕はここに残るよ。ホラ、僕が行ってもペルソナ、だせないしさ……」

桐条の問いに答える幾月の表情はみるみる消沈して行く。そう。影時間に棺桶にならないからと言ってペルソナを使えるかと問われれば必ずしもそうではないという回答になるのだ。

作戦室へと向かう幾月の背中へ、まさしく哀愁漂う中年のおじさんだった。

そして時は少し飛び、0時直前。

特別課外活動部の面々は月光館学園へと赴いていた。

そこで何が起こるのか全く把握していない伊織順平は辺りをきよるきよると見回すと、続いてきよんとした。どうして学校に？とも言いたげな表情だ。

「えっと、ここって俺らの学校じゃ……？」

「見てればわかるさ。ほら、0時になるぞ」

事態を飲み込めず軽く混乱している伊織を真田は一言でたしなめる。

すると真田の言つとおり0時になった瞬間。

世界は反転した。

他にその現象に似合う表現が見つからない。

それ程までに、生と死が、心と体が逆転していた。

今までただの学校として佇んでいた建物は機械仕掛けのようにその構造を変え、明らかに学校の体積を越え更に上へと伸びていく。

初めて見る現象に伊織はおろか有里すら幾ばくかの驚きを示していた。

そうして完成した、アートのような塔。

「——これがタルタロスだ」

タルタロスを見上げるように見つめていた一同の背後から、一人の男の声が聞こえてきた。

思わず一斉に振り返ると、そこには。

まず最初に、岳羽が拍子抜けした表情で口を開いた。

「なんだ、里峰君か」

「なんだとはなんだ！」

思わせぶりの登場の割にイマイチ閉まらない里峰竜児の姿があった。

春ののどかな季節とはいえ深夜は肌寒いだろうに、半袖のＴシャ

ツにジーンズという随分ラフな格好である。

ラフな格好なのに両手には拳銃、背中には大剣が背負われておりそのギャップが何とも言えないシニールな雰囲気を生み出していた。

そんな里峰を桐条は微笑みながら迎え入れる。

「よく来たな、里峰」

「来てやったぜ、桐条先輩。もう泣きやんだか？」

「んな!？」

何やらニヤニヤする里峰に対し桐条がすさまじい勢いでうろたえていた。

今までに類を見ないほどのうろたえっぷりに真田ですら驚きをあらわにしている程だ。

((一体、あいつらに何が))

一瞬にして桐条と里峰を除いた4人の心は一つになった。

事情を追及したいところだがそれを桐条が許すはずもなく、よくわからないままに話が進んでいる。

「それで、今日タルタロス内部に突撃する面子は？」

「あ、ああ。私と明彦を除いた3人だ。私も行きたいところだが、タルタロスと言う迷宮をナビする役が居なくてな。

力不足かもしれんが私がその役を今は行っている」

本当は自分が先陣切って行きたいだろうに、人材が足らずにサポートに回っているようだ。

里峰は内心ちよびっとだけ同情しながら（桐条が戦えない事にも、続いて戦力を把握すべく共に闘うと言っ3人の武装を確認し始めた。

「はあん。そりゃ別に構わねえけど……こいつらどのくらい戦えるの？」

ええっと、まず岳羽先輩は武装見る限りじゃ弓か……で、有里先輩だったか？」

「うん、そうだよ。僕は有里湊、よろしくね」

「有里先輩ね、了解了解、よろしく頼む。」

んで有里先輩と髭の人……あれ？髭の人なんでここに居んの？」

「里峰さんっすよね！？今日はよろしくお願いするっす！！俺伊織順平、ヨロシクな！！」

「え？ああうんヨロシクね。伊織先輩。俺後輩だからさん付け要らないし、敬語も要らん。」

んで、2人が扱うのは近接武器で良いのな？」

「そうだね」「そのとおり！バツサリ斬っちゃうよ、俺！」

岳羽が遠距離でサポートに周り、有里と伊織で近接で戦う。シンプルだが極まれば最高の布陣になる事だろう。

「桐条先輩から話を聞く限りじゃ3人とも実質初陣って事になるみたいだし、まあとりあえずテキストに1階を回ってみようか」

何となく遠足気分で先導する里峰だったが、ここで一つある事に気付いた。

(……周りに味方が居たんじゃ思うように戦えなくね?)

例えば銃の乱射も出来ないし、シャドウを振り回す事も出来ないし、大剣で回転切りだって出来ない。
下手したら味方を巻き込んでしまうから。

なんだこれは、フラストレーション溜まる一方じゃねえか!! 舐めとんのか!!

(……まあ、流石に昨日の今日でタルタロスだわーい! なんて気分にならんし丁度いいか……)

前日に狩人との死闘を演じた里峰は、正直面倒くさいと言う思考で頭が一杯になっていた。

...

4月20日、月曜日。

昼休みの事だ、俺が桐条美鶴に呼び出されたのは。

またもやクラスメイトからの辛辣な視線を背に浴びながら俺は桐条と共に屋上へと向かった。

「すまないな、わざわざ呼び出してしまって」

「構わんよ。それで、呼び出したって事はあれか?」

「そうだな、あれだな。今日の夜、私達もタルタロスへ向かう。君にも協力してもらいたい」

「まあ、シャドウと戦うつてのが俺の契約だからな。いくらでも戦ってやるよ」

「感謝する。それでだな……」

ん、まだ何かあんの？俺昼寝の続きをしたいんだけど？桐条が何かもじもじしている。一体何が始まるんです？すると意を決したように桐条が口を開いた。

「今まで言いそびれていたんだが……改めて謝罪をしたい。すまなかった」

それは見事な一礼だった。

全日本マナー検定協会でも一発で合格をもらえるのではと言うほど美しい一礼だった。

謝罪するという気持ちが前面に押し出されているそれは、謝罪以外の何物でもないと言える謝罪だった。

……何の話だ。

気を取り直して、とりあえず頭を上げるよう桐条を促す事にした。

「あのな、別に俺はもう良「私が良くないんだ。これは、私なりのケジメだ」……さいですか」

「それでだな。君の為に何か出来る事があればいつでも言ってくれ。桐条グループが総力を挙げて実現してみせよう」

わーおそりやまた随分大きく出たな……つまり、桐条の後ろ盾を得たと言う事か。

正直別に何かしたいわけでもないのに、そんな事言われても困る。

「……そうだな、桐条先輩は多分、影時間を消し去りたいんだろうけど、俺はシャドウを倒す事でしか生を実感できない。」

ビクリ、と桐条の表情は固まる。俺は追い打ちをかけるように言葉を紡いだ。

「……シャドウがいなければ、俺は死んだも同然だ」

「ッ……！そんな事……あるはず無いだろう……君はこうして今も生きている……！それは私が保証する……！！」

俺の言葉に悔しそうに震えている。

桐条美鶴と言う女は、誰かの為に涙を流せる、そう言う良い女だった。

……はあ。少し意地悪が過ぎたな、反省反省。

「……なら、影時間が消えた時、俺がなにをして生きてけばいいか探すのを手伝ってくれねえか？」

生憎と碌な趣味も無くてな。老後が不安になる毎日なんだよ」

「……！！ああ、いくらでも手伝ってやるとも！！」

その時の桐条の喜びようはまるで小さな子供のようで、その笑顔にちよっぴりドキッとしたのは内緒の内緒だ。

「とりあえず、趣味の手始めにバイクとかどうだ？風を感じたくな
いか？オーバードライブしたいと思わないか？どうだ？ん？」

「誰だお前！」

追記、桐条美鶴はバイクの事となると人が変わるらしい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0597z/>

転生したと思ったらペルソナ

2011年12月8日20時43分発行